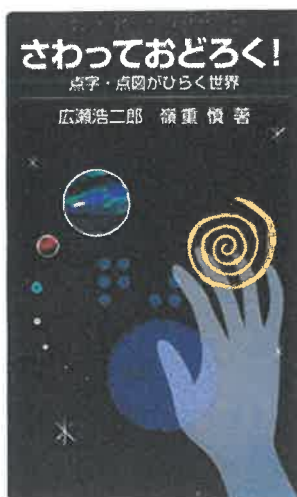


広瀬浩二郎先生の 「触文化」セミナー

動画に字幕をつけて日本社会事業大学から全国に発信
しよう！！



画像 Amazon HP より

広瀬浩二郎先生オンラインワークショップ

「それでも僕たちは『濃厚接触』を続ける」

皆さんこんにちは。広瀬浩二郎です。今日は10月に出版しました新しい本「それでも僕たちは『農耕接触』を続ける！」という本を出したんですけど、この本の紹介、プロモーションということでお話をしようと思います。

まずこの本10月に出版ばかりなんですが、表紙が特徴的です。これ触図、触る図とか点々の図、点図って言い方をしますが、触っているような触感が楽しめるような図をデザインしています。で、なんでこんなことをしたのかというと、タイトルが『農耕接触』ですから、今の世の中、“非接触”ってことが言われますけども、あえてそういう時代に、やっぱり接触すること、しかも濃厚にじっくりじっくり触るって大切じゃないの？と、そこから得られる情報があるんじゃないの？ってことです。で、それをまず体験していただく意味でこういう表紙を作ってるんですけど、、、 続きは動画をご覧ください。



「それでも僕たちは『濃厚接触』を続ける」(上級編) トーテムポール編

皆さんこんにちは。国立民族博物館の広瀬浩二郎です。

今日は、オンラインワークショップ「世界の感触を取り戻す」の上級編、ということです。

ここ国立民族博物館、「みんぱく」の前提にあります、大きなトーテムポールをじっくり、ゆっくり、触って行こうと思います。このように大きな資料を触るときのキーワードは2つあります。ソウゾウリョク、「2つのソウゾウリョク」って言うんですけど、1つは造る方、「クリエーションをする」という意味の創造、そして2つ目の創造力は、イマジネーション、想う方の想像力です。、、、 続きは動画をご覧ください。



ろう文化と盲文化について皆で話し合ってみた。

ろう者の意見

それぞれの意見を聞いて当事者自身の見方と周りからの見方が違うこともあるということが分かった。例えば、当事者自身は健常者の文化は日常生活の中にあるため、健常者の文化は多少知っているつもりだ。しかし、健常者から見ると当事者の文化は聞きやすいが、健常者の文化について当事者たちから見ると大きい文化のため、聞きにくいのではという意見があった。それぞれの見方を聞くことが出来いい機会だった。

アメリカのドラマ「グレイズ・アナトミー」に準レギュラーでろうの俳優が出ていると知った。この前には MARVEL シリーズにもろうのヒーローが登場し、色々話題になっていてアメリカはろう者の芸術関連の分野での活躍が盛んだと改めて思った。3年生の盲人に関する情報共有では、冷凍食品や菓子箱などの識別のためにシールに当てると音声で教えてくれる機械があることや展示シールが Amazon で買えることなどを学んだ。「触る文化」の本も読んでみる。

先日、帰り道で国連 UNHCR 協会という団体が支援を呼びかける運動を駅前で行っていた。なんだろうと思って見ていたら、女性に呼び止められたので「耳が聞こえません」というと、どうにかして伝えようと考えてくれたので UD トークを使って少しお話しさせてもらった。前にも同じ場所で他の人に呼び止められたが、耳が聞こえないという「すみません」と言って去ってしまったので、今回は幸運だった。 UNHCR は難民や帰還民などの人々を支援する団体であり、得た支援金は CM などの活動に回さず、少しでも多くの食料を難民そしてその子供達に届けようとしているとのことだった。栄養不足で口が閉まらなくなっている子供の写真とともに、小さなチョコレートバーも見せてくれて、それにはおにぎり 3~5 個分のカロリーが含まれ、10 円あれば 1 個分用意できる。コロナ禍で支援対象の子供の数が過去最大になっている。UNHCR では月に自分で自由に金額を決めて寄付をすることができる。学生でも無理のない範囲で支援をすることができるを知った。夜にしかも寒い中多くの人に呼びかけ運動をしていて敬服の気持ちしかなかった。自分にも簡単に力になれることがありと知り、貴重な時間になった。今後もう少し調べてみて支援の行動を起こしたい。

これまで自分の「文化」について考える機会が無かった。盲文化やろう文化など世界には様々な文化があり、多くの人々に自分の文化を理解してもらうために演説など活動している人々もいる。考えの違いによって対立することもある「文化」に囚われず、ありのままの自分でいられる、「無知（無意識）」の方が平和なのではないか、と感じた。しかし、肩をたたくなど自然とろう文化に影響を受けている私が「異文化」に悩まず生活できているのは、

これまで多くの人々がろう文化に対する理解を広めてくれたからなのではないか、と考えさせられている。異文化を比較するだけでなく、受け止めることを大切にしたい。

支援者（非障害者）の意見

私は美術館で監視の短期アルバイトをしていたことがあるが、作品には、

- ・誰でも触っていい作品
- ・視覚障害のある人は触っていい作品
- ・誰も触ってはいけない作品

の3種類があった。展示会期間中に視覚障害のある方は、私は1人、2人しか見かけず、晴眼者が触ってしまっている時に注意をしなければならないことの方が圧倒的に多かった。不特定多数の人が触れることには作品を傷つけるリスクもあるが、「触ってみたい」と思う人はたくさんいるのではないかとその時のことを思い出して思った。しかし触れる体験が可能な場は圧倒的に少ない。「作品を触って鑑賞する」というのは、盲の文化を知ることに関がるだろうし、広瀬さんの取組みには注目していきたい。

晴眼者、聴者としての文化の違いという部分では、文化という風に考えたことがなかったことに改めて感じた。五感を使うという言葉があるように、私たちは全てを使って様々な情報を取り入れている。それはいいことだけでなく、時にその後のコミュニケーションに支障をきたすこともあるが、これが私たち見える、聞こえる人々の文化なのかなと思った。日本人としての文化もまた、海外に出てみないとわからないことが多く、実際に海外に出てみると日本のいい部分、悪い部分が目に付く。福祉を勉強する人々の中から、一歩外に出てみると、新たな社会があるように、もっと視野を広げ、自分自身の文化、社会に目を向けていきたいと思えた。

文化についてのお話はとても興味深かった。ろう文化と盲文化では、使う感覚（視覚・聴覚）の違いによって思考やイメージの仕方が異なっていて面白かった。ろう文化では、見る・手話（手形）表現の文化であり、相手の特徴や年齢、性別などでイメージをするため情報が欲しくなるという話を聞いた。英語でも男女の表現が必要だが、ジェンダーの多様化により、he.sheではなくtheyと表現する人もいると聞いたことがある。ろう文化にもその動きが始まっているのだろうか。マイノリティーは、マジョリティーの世界で生きていくために、ルールを覚える必要があるという。視覚障害についての本では、視覚障害者は人の話を聞いていても、顔が下がってしまうことがあり、これは見える人の文化では失礼になるから気をつけよう。と書いてあった。これは見える人たちが聞いているアピールをするためのものであって、別に相手に求めているわけではない。視覚障害者はこの文化にわざわざ合わせてくれているのだと思った。しかし、障害者だからといって、なんでも「大丈夫、気にしないよ」と言われるのも嫌だ。言って欲しいという意見も本には書いてあった。

ろう文化と我々（健聴）が生きてきた文化では相容れない部分があり、それらは理解し合えないだけでなく衝突していると思った。言語なんかはそれが顕著に感じられ、日本語は文化の大きさから手話に対して押し付けることになっている。文化同士が交わっている部分は芸術や生活で理解し合える環境が作られていると思うが、福祉を学んでいる人いない人、クロスアドボカシーに比べたらまだまだ足りないと思う。私自身ろう文化を知りたい、理解したいは今後も続くと思う。交わり方や文化の広げ方を自分なりに考えていきたい。

わかりやすいものの方が障害者にとっていいだろうという、健常者側の決めつけを感じたという話があったが、私自身も無意識にそう思い込んでいることもあると気づかされた。しかしむしろ逆で、できないことがあるからこそ、より多くの情報を提供し、伝えるべきであると感じた。

日本人は手助けをあまりしない、福祉が多くの人「当たり前」になっていないという話もあったが、私自身もそう感じた。駅で車いすの方が駅員の手を借りて電車の乗り降りをしている場面を見たが、その車いすの方は「本当にすみません、お手数おかけします」と何度も謝っていた。そんなに何度も謝らなくてもいいのに、当然の権利なのに、と思ったが、それは社会の雰囲気が障害者に対してそうさせていると感じた。

「社会とこの大学には温度差がある。福祉は別世界のことだと思っている人が多い。」「社会では口話を強要されない。社会に出た時口話ができないと困ると言っているのは学校現場だけだ。」という話がありました。自分が社会福祉と教育を学んでいる意義を、改めて考えさせられました。これまで、教育学部出身ではない教師になることに不安や劣等感のようなものがありましたが、福祉と教育の架け橋となること、当事者や支援者に共感・傾聴の姿勢をもつこと、代弁者となり社会を変えていくこと、社会に福祉を浸透させていくことは、今後、私だからこそできることになっていくのだと思いました。この気持ちを忘れずに、これからも学び続けていきたいです。

様々な意見を聞く中で、身近な場面で文化の違いがたくさんあることに気づいた。日本という一つの国としての文化だけではなくて、障害のある人とない人の間で、さらには、障害のある人の中でも、障害の種別によって、あるいは、障害の程度によって文化の違いがあることを改めて感じた。社大は、授業や障害のある学生との交流を通して、異文化を知る機会がたくさんあるが、一步社会に出ると、それは当たり前のことではなくて、マジョリティの文化を基本として成立しているのだと痛感した。異文化は、実際に学んだり触れたりしてみればじめてわかる部分が大きく、それを知らずに自分の文化の中だけで生きていると、文化の違いに気づけないし、自分とは関係のない世界で生きているような他人事のように感じてしまうと思った。

地域連携クロスアドボカシー事業



Mr. Wsatanabe & Ms. Suzuki

at 清瀬第五中学校

渡邊健一氏：相模原市経営評価委員会委員、元高等学校福祉科教師

鈴木美彩氏：日本社会事業大学4年生、オリンピック・パラリンピ

ック NHK 生中継のろう通訳



写真：

https://dot.asahi.com/print_image/index.html?photo=2019040100006_2&image=2

清瀬五中でのクロスアドボカシーセミナーの様様

手話通訳士もオンライン→



←様々な機器を説明する渡邊先生

クイズで大盛り上がり→



2022年2月18日(金) 13時45分 清瀬第五中学校2学年オンライン交流授業
日本社会事業大学クロスアドボカシー地域連携事業とのコラボ

清瀬第5中学校平賀先生

今日は障害者理解のため。これまでSDGsについて学んできた。二学期には車いす体験。一時中断していたが、福祉について、清瀬市長になったらなにができるか、と考える。今日は障害のある方と交流して共生社会を考える。社会にある様々な障壁を自分のこととして捉え、よりよい社会づくりへの考えを深める。様々な人の協力のもと成り立っている。本当は体験授業をやりたかったが、初めての試みで、様々な場所から参加。社会福祉協議会のボランティアセンター長星野様に多大なるご協力をいただいた。ご挨拶を。

星野

皆さんボランティア・市民活動センターを皆さん知っているかもしれない。小学校のとき夏の体験等で。手伝ってほしいというお話があったとき困っているひをつなぎ合わせる仕事をしている。SDGsを学んでいるとのこと。地域でいろいろな方が生活している方々がいてその中で何かやれることがないか考えていただければと思う。今日は視覚障害者渡邊健一さんと聴覚障害の鈴木美彩さんにお話しいただく。鈴木さんのお話は手話通訳さんに通訳していただく。企画に加わった社会事業大学齊藤先生、手話通訳は岸澤さん、折田さん。まず、視覚障害渡邊さん神奈川県からよろしく。

渡邊

相模原市に住んでいる。皆さんぐらいのときは弱視で、良い方の目で0.02だった。高校一年で全盲になった。今日は楽しくお話したい。テーマは『情報バリアフリーの暮らしをデザインしよう～見えない、見えにくいから見えてくること。』「ヤンキー君と白杖ガール」のドラマを見たかもしれない。弱視、ロービジョンという。自分は弱視と全盲と両方経験した。自己紹介と、見え方の種類、障害の種類を紹介し、情報バリアフリーについてお話したい。相模原市に住んで14年。皆さんが赤ちゃんの頃、一人暮らしを始めた。エレベーターのない4階。息をきらして上がる。でも皆さん丹沢の山が見えて、気持ちいいと言っている。自分は生まれつき弱視で、眼鏡をかけても0.02の強度弱視だった。

使っていた道具がこれ。



写真1

単眼鏡と言う。これで黒板の文字を覗いていた。一番前の席で。うしろからだが無理。教科書は、置いたままスライドさせて使うルーペで、文字を大きくして読んでいた。



写真2

レンズの中に何文字か、複数の文字が表示される。大きい字で太い文字でやっと見える漢字テストをたまに100点とったりしていた。

今はほとんど字を手書きすることはない。点字を使う。

6年生の時1年間点字を習った。

中学入学ぐらいから英語、数学が難しくなり、点字を使い始めた。

そのころは紙の点字の本を読んだり書いたり。今では点字ディスプレイを使っている。USBをさすと、テキストファイルを自動的に点字に変換できる。こんなふうに

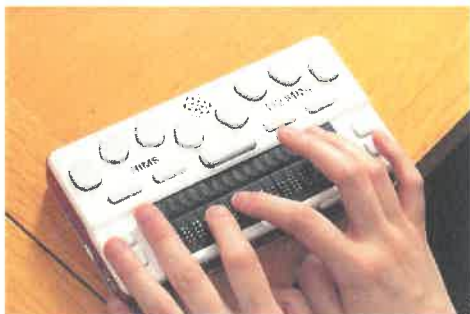


写真3

最近はこれで研究もしている。

仕事は以前ちょっとだけ高校の先生をしていた。ちょうど中2のとき先生になりたいと思った。横浜市立盲学校にかっこいい先生がいた。マラソン部の顧問で、途中から目が見えな

くなった英語の先生。こんな先生になりたいなと思った。

六年ぐらいまえに法政大学の大学院を修了して修士号を取得した
修士論文 100 ページぐらいの冊子にした。

大学院を卒業したあと、相模原市で審議会の委員をやっている。

相模原市の経営評価委員会で市長さんに意見を言ったり、行政のチェックしたり、提言をし
たりしている。最近ではオンラインで全国の大学の先生や研究者と研究会をやっている。

おとうさん、おかあさんも見えない。母は点字朗読をしていて、渡邊信子の朗読の部屋とい
う YouTube で朗読を発表している。父は中途失明。高校野球でピッチャーをしていたが、
けがして、その後 20 歳ぐらいから見えなくなって、40 歳で脳梗塞で左半身麻痺、50 歳か
ら言語障害になり、複数の障害、重複障害という。今 77 歳で、介護老人保健施設、ろうけ
ん、に入って元気になっている。

自分は、弱視のときは見え方は曇りガラス状態だった。

まぶしい光が入ると見えにくくなる。むしろ暗い夕方からのほうが見やすかった。

高一で全盲になったが、自分の場合まっ黒ではなく、真っ白。

両親のおかげで小さい頃からピアノを 10 年間ならっていたので、小学校のとき即興演奏な
ど頼まれるようになり、高校の時はバンドのメンバーになった。

点字の楽譜もある。そのころは習いたてで読めなかった。ピアニストやバイオリニストの盲
の人はそれを暗記する。自分はできなかったけど絶対音感ができたのでバンドで合っ
てる？とギターやベースの人から聞かれるようになった。音楽が趣味。

小5 のとき白杖を持つようになった。折りたたみの白いつえ。



写真4

眼が不自由な人ですという白い杖。黒いところを持ってスライドさせてあるいている。自分
の場合たたいては歩かない。おりたたまない直杖という頑丈なつえもある。

中学三年の夏休み、電車のホームから転落。頭からおちて後遺症が残り今も大変なときはあ
るけれど、なんとか生きている。

今でも転落する人はいる。自分の場合ホームが肩幅くらいしかないほどせまくて、点字プロ

ックもなかった。車掌さんによく見える位置で落ちたので駅員さんに連絡してくれたが、残念ながら電車にひかれて、、、という例もある。ホームドアや柵をつけてほしいと、声を上げている人たちもいる。

見え方にはほかに、原因は糖尿病のため、脳腫瘍のためいろいろ。

最近駅伝で網膜色素変性症の人が走っていた。これは暗い状態になるとほとんど見えない。明るいときは見えるので走る。LEDで明るく見やすくした所で練習しているとのこと。将来だんだん見えなくなる。

実際見えなくなる人がたくさんいるので、思い出してほしい。

最後にバリアフリーの夢を語る。生活面、文化のバリアフリーになるといいな。その可能性も見えてきた。

最近プリマハムの商品には、点字で「プリマハム ベーコン5枚3パック」とか「ロースハム4枚3パック」と書いてある。

お店で点字ラベル付きハムを見かけたのはプリマハムだけ。うれしいので買ってしまった。BINGOにも20とか31とか書いてある。フリーなどと書いてある。点字のラベルを貼ると自分にもできる。

こういうものが徐々にできてきた。オセロのマスが凹凸になっている。

ぐるぐるまきになっているほうが黒、白はつるつる。白黒判別できる

これなら一緒に楽しめる。こういう生活面でのバリアをフリーにしていけるといい。

最近のキーワード、読書バリアフリーというのがある。電子書籍を読んでいる人いると思うが、今音が聞こえているかと思うが、パソコンに音声読み上げソフトが入っていて、女性の音声がかかっている。これは「みさき」という名前の音声でワードとかエクセルメールインターネットの文字を読み上げてくれる。

ホームページをみるときはリンクがあって、第五中学校のトップページに、今日のニュースとか書いてあるリンクのところはよみひでくんという男性の声。本文のところはみさきちゃん。音声読み上げの機能が使えるということを知ってほしい。

星野

25分です。

渡邊

つづきはまた後程。

鈴木

大学4年生。斉藤先生に教えてもらって4年目になる。社会事業大学の場合、ろうの学生がたくさんいる。ろうの先生もいる。手話で勉強すすめてきた。

さいたま市にすんでいる。皆と会いたかったがコロナかで残念。

一口に聴覚障害者と言っても一対一なら話せる人もいる。

今まで聞こえないこと、手話については知っている人はいるけれど、ろう者という言葉は知

らない人が多い。私はろう者という立場で話す。

今日は聞こえない人の世界があるんだということで、見識を広げてほしい

「この前聞いたあの話」と思ってもらえるとうれしい。

耳が聞こえない人、ろう者と言っても聞こえの状態はまちまち。全く聞こえない人もいる。その日の体調、年齢、環境もある。おとなになってから聞こえなくなったのかどうかによっても違う。手話を使う人そうでない人。私は両親がろう者で手話だったので自然に手話を覚えた。補聴器も使わない。発語もしない。

乳幼児期のときは難聴のようだった。お父さんが車で帰ってくると気づいたという。おもちゃの音もわかったと。

ろうなのか聴なのかと親は考えた。今は検査があるけれど、当時は検査は希望者のみ。

両親は聴者かどうかこだわらなかったのだから検査を受けさせなかった。

私は声や音を聴いた記憶がない。ろう学校と保育園に通っていた。どちらか一つに決めてくださいと4歳のとききかれ、ろう学校がいいと言ったらしい。4歳ながらも言葉が通じるほうがうれしかったらしい。

聴力について。聾学校では一年に二回ぐらい検査がある。数値で表される。私にとっては意味がない。聞こえるかどうか数字で判断する人もいるけれど、音を聞いたことないので関係ない。一週間に一回発音の時間があった。何か言っているけどまねしても正しいかどうかわからない。先生の表情で判断するだけ。二年生か三年生のとき発音の練習の代わりに日本語の読み書きを習得する方がいいのではないかということになり、日本語をきちんと伝えられほうがよいので、お願いした。音声で話す子どもたちとは別に書記日本語を学んだ。

聞こえの状態は聴力検査でいくつかと聞かれて、いくつとこたえたら、友達に同じといわれた。普通にその子は話していた。騒音のあるところでは無理だけれど、一対一なら話せていた。

私は幼いときから聞くことがなかったが、その友だちは厳しい訓練を受けてきた。

防音の部屋に入って聞こえたら合図をする。

一般の生活では雑音があるので、検査の数値とは違う。読唇も、想像する力など総合しているのだと思う。

次に、私は手話を使って育ってきたので手話についてお話する。

「日本手話」という。音声言語もあるし、アメリカ手話、韓国手話、ベトナム手話、いろいろある。英語と日本語文法が違うように、日本手話も違って、同じ猫の写真を見ても、日本語で茶虎ねこと言うけれど、英語ではオレンジキャットという。つまり言語が違うと受け取り方が違う。

日本手話と日本語は、文法や考え方が違う。北海道から九州までろう者がいて、それぞれの地域の手話も少し違う。

東と西では手話が違う、「名前」という手話。



名前①



名前②

①東の手話 ②西の手話

<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-43/>

私は親がろう者なので、手話を身に着けた。聞こえる人は自然に音声日本語を覚えてたろう。手話と日本語を親から教わった。二つの言語を生活の中で使った。

大学三年のときに通訳理論を学んだ。日本語と手話の翻訳理論を学んだ。

最近でいうとパラリンピックのときに手話通訳を生放送で初めて採用。音声日本語から手話にかえる。そのとき、ろう通訳を担当した。ろう通訳という仕事を今はしている。日本ではまだまだだが、アメリカではろう通訳が普及している。通訳理論についてひとつ話したい。理論の中、4つに分ける。受け取る、、、理解をする、、、翻訳をする、、、アメリカ手話から日本語に等々。先ほどの猫の例のように文化、感じ方が違う。4番目が表出。

4つの段階を全部担当するのは大変なので、パラリンピックの場合、真ん中で分けた。聞いて理解するのは聴者にまかせる。3番目と4番目を私が担当した。

最近、よく手話通訳がついているので、ずいぶん知られるようになった。ろう者についての理解が深まった。

手話は聾学校で使ってはいけないと言われた悲しい歴史がある。今はろう通訳もあり、どういふふうに勉強すればいいかという研究も広まってきた。

これからも手話をわかってもらおう活動をしたい。

..... 休憩

平賀

なるほどなというお話ばかりだった。後半は、渡邊さん鈴木さんからクイズを出してもらって、楽しみながら理解を深める。クラス対抗で。

渡邊

聞いて触って、幸せ探しクイズ。

(拍手)

第1問

街中の交差点などにある音響信号機は、ここ10年ほどの間に、わりと聞きやすく、わかりやすい音響が使われるようになってきました。それは、どんな音響でしょうか？

【3択】

- (1) 流すメロディーの種類が増えた。
- (2) 青になる瞬間に「ピンポン！信号が青になりました！」のように、音声で知らせてくれるようになった。
- (3) 「カッコー」や「ピオピオ」といった鳥の鳴き声が、2か所から鳴き声の回数を変えて鳴らすようになった。

平賀

しめきりまーす。

渡邊

正解は3番です。

カッコー、カッカコー、ピヨ、ピヨピヨと2か所で、交互に鳴るのでわかりやすくなった。2番の「青になりました」は15年前にあった。これは渡る際にわかりやすくて良いが、まだ少ない。1番のメロディの種類は増えていません。

第2問

駅ホームで、「まもなく〇〇番線に快速△△行きが参ります。黄色い点字ブロックの内側にお下がりください」と音声が流れています。よく聞いてみると…

例えば、1番線が男性音、2番線が女性音。上り線が低温の男性、下り線が高温の女性のアナウンスになっています。このようにして、わかりやすく伝える工夫がされています。

○か×か。

正解は○。コントラストがあると現在位置を把握するのにわかりやすい。どの電車に乗るか迷った時などにも助かりますね。

第3問

先月、八王子でブラインドサッカーの日本選手権の決勝戦が行われました。

目黒区と横浜市のチームが対戦したこの試合を、私はTBSラジオでの実況中継で聞きました。

実況中継のアナウンスで、ある工夫がされていました。それはどんな工夫でしょう？

【2 択】

* ヒント：耳だけで聞いている視覚障害のある人や聴者にも、試合の動きが少しでも伝わりやすくする工夫でした。

(1) 男女 2 人のアナウンサーで実況し、メインのアナウンサーが実況するのをサブのアナウンサーが説明などでフォローしていた。

(2) 男女 2 人のアナウンサーで実況し、ボールが相手陣営のものに代わるごとに、アナウンサーも交互に代わって中継をしていた

(例えば、男性アナは目黒チームのボールの時、女性アナが横浜チームのボールの時に実況する)

正解は 2 番。

第 4 問 (時間の関係で出題省略)

3 月 18 日は“点字ブロックの日”です。「点字ブロック」は、1965 年に三宅精一さんによって考案・開発されました。“日本発”の視覚障害者の安全な歩行と交通バリアフリーを目指すシステムです。

世界で初めて、岡山県の交差点に点字ブロックが敷設されてから、今年 3 月で、満何周年でしょうか？ 【3 択】

(1) 40 周年

(2) 50 周年

(3) 55 周年

→正解は 3 番。

第 5 問

* 視覚障害の当事者になったつもりで、考えてみてください。

東京ディズニーランドとディズニーシーでは、全盲などの視覚障害のある来館者にも、点字による解説や凹凸の模様で、パークの図面を触ってイメージしてもらおうと

「触地図ガイドブック」を製作しています。合わせて「インフォメーションCD」も作られ、ナレーターの方々が、それぞれのパーク内を音声ガイドしています。

さて、この「触地図ガイドブック」や「インフォメーションCD」は、いつ、どんな時に読んだり聞いたりして使うと便利でしょうか？

* ヒント：あなたなら？

(1) ランドやシーに行ってから、ベンチやレストランなどで読んだり聞いたりする。

(2) 行く前に、予め「どこへ行こうか」計画したりイメージするのに使う。

(3) 行く前と、行ってからの両方で使いたい。

平賀

Thinking time

渡邊

正解は

全員正解。ぼくだったら行く前に使いたい。

(出題者交代)

鈴木

直感的に考えてほしい。

第1問

手話で話すとき使う場所は、

1. 手
2. 顔
3. 肩
4. 全部

正解は4番

イエス・ノーを眉上げで表現したり、目上に話すときは、肩をすぼめるなど。

第2問

眼鏡が三つある。ろう者の眼鏡はどれか。

1. ぼろぼろになっている眼鏡
2. 大きい眼鏡
3. おしゃれな眼鏡

チャット：ホワイトボードにも書いてくれているのがいい。

正解は1番。ぼろぼろ。これはちょっとジョークも含まれている。

手話を使うと、顔に近いところで表す「父」とか「母」とかの手話で、眼鏡に当たって飛んでしまうので、ぼろぼろになる。

第3問

ろう者の家族、家の中ではうるさいか、静かか。

1. 静か。
2. うるさい

正解は2。ろう者は音を気にしないので、ドアをあけしめしたり、お皿を洗ったりするとき、音を立てる。私の弟も音に敏感ではない。

平賀

ありがとうございました。

続けて生徒からの質問コーナー（登校している学級委員さんたちが順番に質問）。

渡邊さんへの質問

生徒

点字ブロックがない場所ではどうやって歩くんですか？

渡邊

周りの音とか風向きとか風の通り方、広いかせまいか、壁がるか。自分は足に集中する。

生徒

音がない信号機を渡るときはどうするか。

渡邊

車の音を聴く。でも、その信号は使わない。車の多い道路、人がいっぱいいるところを渡る。

生徒

スマートフォンはどうやって使うのか。

渡邊

二つパターンがある。母は73歳で 아이폰をつかっている。
つるつるなので、とても使いにくい。そこで、私からブルートゥースキーボードを勧めた。
テンキーのキーボードを操作する。5番の所にポッチがついている。
電話をとったり、切ったりは大変そう。
(ガラホの音声をかきかせる)

リンクの所を男性音、本文を女性音で読み上げてくれる。

キーワードやリンクがたくさんあると探すのは大変。

タップ操作の兼ね合いはむずかしい。年齢が高いと操作がうまくいかなかったり。自分も苦手だが。

生徒

生活しているとき危険な場面はどういう場面か。

渡邊

液のホームの例も話したが、買い物に行くとき、駐車場を横切らなければならないスーパーは一人で行けない。道路側に近ければよいのだが。歯医者には曲がり角なのでひとりで行ける。

生徒

宅配便の不在連絡票はどうするのか。

渡邊

一週間後へるばーさんに確認ということもある。スマホに不在者用の手続き登録をしている。音声ガイドで、一番を押して、といわれて、、番号指定になっているので、番号無しでかけられるといいなと思う。

生徒

買い物をするとき、商品をどう見分けるのか。

渡邊（4個入りの肉まんあんまんを実際に手にして回答）

肉まん、あんまんとか、点字がついているとよいが。ヘルパーさんが一緒ならヘルパーさんに説明を聞く。この形だな、5個入りより小さいな、と手に取って確認。

この肉まんは袋を触るだけではわかりにくい、肉まんに切込みがはいっている。あんまんはつるつる。

鈴木さんに質問

生徒

緊急時どうするのか。

鈴木

緊急と言っても、状況によるが、電車事故、突然来ないとか、止まってしまうとか。スマホをみるとTwitterに出ていたりする。放送が聞けないので、スマホで「あと一時間待つなん

てやだあ」などと流す人がいるので、それを読む。地震のときはろう者は不便。情報が遅れて死んだ人がたくさんいる。周りの様子を見る、、、教えてもらう。手話通訳がいるといいなと思う。

生徒

夢の中で音は聞こえるのか。

鈴木

夢は見ないし、たまに見てもすぐ忘れるので、、、音は生活の中に存在しないので、有名人と手話で会話した夢などみて、夢の中でへんだなと思ったり。
夢の好きな友だちは、夢で空を飛んだりしているらしい。

生徒

マスクをつけているので伝えられないことはあるか。

鈴木

手話は眉や口の動きを使うので、情報が足りなくなる。
コロナ禍で、はっきり頷いたり、眉をはっきり動かすようになった。
声は使わない。口を読み取るタイプの方は苦しいらしい。
自分も顔を見て話しができるほうがいいけど。

生徒

聴覚障害者共通に嬉しいことは何か。

鈴木

手話を使ってもらうことがいちばんいいけれど、文字による情報がほしい。聞こえる人でもそうだろう。マクドナルドで順番が番号で示されたら、誰でも助かる。電車の文字情報「各駅停車」とか「急行」とか。

生徒

生活の中でどんな工夫をしているか。

鈴木

親もろうなので工夫はないが、聞こえる人との違いというと、光インターホンやスマホのバ
イブを使っている。
それから見える位置に障害物をなくして、目に見える情報を増やす。見える位置に座るなど。

生徒

情報を得る上で頼りにしているものは何か。

鈴木

最近テレビに字幕がある。NHKなど字幕が便利。

映画もネットフリックスはほとんど字幕がある Amazon は少ない。

Twitter など調べるのもスマホ。

電話リレーサービスというのができて、ろう者も電話ができるようになった。スマホをつかって。

星野

5中のみなさんありがとうございます。最後にお話し、クイズ、質問と盛りだくさんだった。

渡邊さん・鈴木さんから感想を。

渡邊

皆さんありがとうございます。オンラインでうまく伝わらなかったところもあったが、カメラが動いてくれてよかった。反応してくれて、嬉しかった。

読書バリアフリーの一例。今持っている本の表紙に「触る文化への招待」、「ドラえもんの点字付きさわる絵本シリーズ」などと、点字で書いてあるので何の本かわかって嬉しい。

小さい頃から見えない人も楽しめるようになってきた。

こうしてタイトルだけでも点字をつけてくれている本が増えるといいなと思う。

そういう商品開発してくれる人が、皆さんの中から出るとなると嬉しい。

鈴木

今日は中学生の皆さんと話せてよかった。ありがとうございます。渡邊先生からもお話が聞けて勉強になった。

星野

ありがとうございます。

一生懸命聞いてくれて、渡邊さん、鈴木さんにもやりがいがあったかなと思う。

考える時間をつくって感想を聞かせていただきたい。

最後にご案内。平賀先生から地域共生社会という言葉が出てきたが、障害者福祉センターにニックネームをつけてくださいという募集をしている。

今日学んだことも活かして愛称を考えていただきたい。

中里副校長先生

今日はありがとうございました。わかりやすいお話で、生徒もそれぞれ参加しているのかなと感じたと思う。これから社会に貢献していければと思う。

平賀

本日の感想を月曜までに記入してください。

渡邊さん、鈴木さんにも渡します。

総合の時間で、どのように清瀬市をよくしていくかということを考えて行こうと。

本来体育館のはずだったが、コロナ禍だからこそできたかなと思うところもある。

ありがとうございました。

終わった後で-----

鈴木

中学生の皆さんに伝わるかどうか不安な部分もありましたが、斉藤先生や田村先生、星野さん、皆さんが分かりやすいと感想を言ってくださってホッとしております。肉まんとおんまんの話や電車のホームの危険性など、渡辺先生のお話も大変勉強になりました。この度は改めて自身を振り返る良い機会にもなりました。ありがとうございました。生徒の皆さんの感想も楽しみにしております。

渡邊

チャット投稿は、皆さんの話している声や、周囲の音を聞き分けながら、読ませていただいています。チャット画面上では全部を音声読み上げしないので、私の場合は、皆さんからのチャットのログをコピーして、別のメモ帳（マイエディットと言います）に一度張り付けてから、一行ずつ・一文字ずつを確認しています。僕も、学部の3・4年生頃から、福祉教育に参加させていただいてますが、当日直前までの気持ちの持っていく方というのが、なかなかハードで、始めた頃は、落ち着かないことが多かったです。それが、いつしか「次は、どういう話題を出そうか？どんなふうに伝えれば」と考えるのが楽しくなってきた、本番より前の準備期間の方が、福祉教育に“関わっている”ということを実感させていただけるようになりました。本番は、数時間（数十分）なので、あっという間に過ぎていきましたよね！なので、「事前→本番→事後」のプロセスが、醍醐味です。責任もあるので、簡単なお仕事ではないですが、僕、鈴木さんのように、先天性の方が、こうして活動していくのは、社会の発展にとって、また皆の幸せにとって、とても意味のあることかなあと、思っています。余談ですが、僕にも、（目の見える）晴眼者の弟がいます。実家へ帰った時、実家近くに住んでいるので、お正月にちょこっとだけ会いましたが、甥っ子、姪っ子の成長がほんと早くて……お年玉の用意と、（僕の場合はピアノですが）かくし芸をレベルアップをして彼らの流行に合わせるのが大変です（苦笑）。おんまんはツルツルなのでわかりやすいですが、肉まん、ピザまん・カレーまんの違いは難しく、面白いですね！！

以下は生徒さんのリアクション

<p>1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。</p>	<p>1. とも理解を深めることができた</p>	<p>2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。</p>	<p>とも理解を深めることができた</p>	<p>3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。</p>	<p>大切なお時間ありがとうございました。目の自由度がだんだんと無くなっていく中でも、諦めず頑張っていた、というお話を聞いてとてもすばらしいとおもいました。また、もともと自分たちに何ができかを考えさせてくれた時間でした。私達は共生社会のために、一人一人が自分のことのように考えて、行動していきます。これからも体を休ませてください</p>	<p>4. ゲストティーチャーの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。</p>	<p>大切なお時間ありがとうございました。せいいかつおなかで行動に制限があるはずなのに、そんなふうを感じさせないおはなしのしかたで、とても勇気ももらいました。耳が聞こえないから、、、ではなく、前向きに捉えちゃうと人の手を借りながら、これが共生の一番に頑張っている鈴木さんを見て、これが共生のかな、とかんじました。自分たちも、これから何をできるか考え、共生社会のために頑張っていきます。これからも体に気をつけてください。</p>	<p>5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。</p>	<p>他人のことだから、ではなく一人一人が自分のことのように考えていけば必ずやよい世界になっていくと思うので、できることは何でもやってみようと思います。また、障害者の方々ががんばっているのを見て、とても勇気をもらったので、もっと頑張っていきたい</p>
<p>2. とも理解を深めることができた</p>	<p>とも理解を深めることができた</p>	<p>実際に目の不自由な方の使う機能や道具を紹介してくれたのでとてもわかりやすかった。また、クイズ形式にしていたため深く考えることができた。</p>	<p>耳の不自由な方にとって大変なことなどを教えてくれたので「そうなんだな～」と思った。また、クイズにしていたのでとても興味を持つことができた。</p>	<p>社会全体のバリアフリー化を目指して、全ての人が過ごしやすい環境にしていきたいと思っただ。また、耳や目が不自由な方が困っていたら勇気を出して助けようと思っただ。</p>					
<p>3. おおむね理解できた。</p>	<p>おおむね理解できた。</p>	<p>14年間も一人暮らしをしていることを知って私は絶対に無理だなと思いました。色々なお話を聞いてすごいなと思うことがたくさんありました。</p>	<p>耳が聞こえなくて大変なことでもたくさんあるけどそれを乗り越えて来たことがすごいなと思いました。</p>	<p>町中で障害のある方とは判断ができないけど困っている人がもしいたら勇気を出して声をかけてみたいと思います。</p>					
<p>4. とも理解を深めることができた</p>	<p>とも理解を深めることができた</p>	<p>私はお話を聞いて、学生生活の中で色々な道具を使って勉強していたことが分かりとても学習になりました。またデパートに売っている商品にも点字などの工夫がされていることを渡邊さんの話を聞いて初めて知り、身近なところにも自分が見ていないだけでその様な工夫がされている点は意外と多くあるのがなと感じました。今回渡邊さんがお話ししてくださった内容を視覚障害のある方との交流へといつか繋げられたら良いなと私自身思いました。貴重なお話をありがとうございました。</p>	<p>私はお話を聞いて、情報収集に使っているスマートフォンや4つの段階で行っている手話の翻訳など生活の中で活用している様々な事柄への理解がより深まり、勉強になりました。またクイズの時に手話は手助けを動かすものかかとも今まで思っていたのですが、肩の動きもこのようにも大切な役割を果していることを知り、非常に驚きました。鈴木さんのお友達である方が行っているしやる読唇術というのも初めて聞いたのでとても興味深かったです。私は手話に興味があるのも今回鈴木さんがお話ししてくださった内容がとても勉強になりました。興味深いお話をありがとうございました。</p>	<p>多様性を考えた生活面での意識をしていけるようにしたいと思っただ。また、町中で困っている人がいたら、どのようにならなくても勇気を出して自分から声を掛けてみることも大切だと思っただ。お2人のお話を聞いて私達のサポートがどれだけ大事なのか理解することができ、私自身も生活へ活かしていきたいと思っただ。</p>					
<p>5. とも理解を深めることができた</p>	<p>とも理解を深めることができた</p>	<p>今回、実際に視覚障害者の渡邊さんと交流をして改めて目が見えないという大変さを知ることができました。お話を聞いていく中で今までの皆さんの苦労をさされてきたことがよくわかりました。ですが、私が一番印象的に残っていることは、目が見えなくてもとてもポジティブに生きていることが、話を聞いているだけで伝わってきました。自分の苦手な部分をネガティブに考えてではなく、ポジティブに、前向きに考えて生きていくこと。これからは、ぜひ参考にさせていただきます。ありがとうございました。</p>	<p>今回、実際に聴覚障害者の鈴木さんと交流をして改めて耳が聞こえないという大変さを知ることができました。お話を聞いていく中で今までのさん工夫して生活してきたことがよくわかりました。私達も普段生活していても不便に思われないけど、老若の方にとっては使いにくいポイントがこの世の中にはまだまだたくさんあるんだな一と思っただ。これから生活していく中で大きいことではできなくても、小さいこと（手助け）なども今後、積極的にできるようにしていきたいと思っただ。ありがとうございました。</p>	<p>これからは大きなことを目標にするのではなく、手助けや席を譲るなど目の前にある簡単な目標をコツコツと取り組むことが大切だと思っただ。</p>					

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。	3. ゲストティーチャーターの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーターの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
6 とても理解を深めることができた	読書バリアフリーや、解説の工夫など様々なバリアフリーの形がある事がわかりました。音のない信号や、駐車場を横切る必要のあるお店など、自分が普段気に留めていないようなところも色々な改善点があったので、これからは、色々な人の視点からバリアフリーについて考えていこうと思います。ありがとうございます。	手話で話すのは、少し難しそうだなと思ったけれど、簡単な手話を覚えて、少しだけ手話でお話したりはできるのではないかなと思います。文字を書いたり、スマホにうつたりして、お話したりもできるので、耳の不自由な方たちとも仲良くなりたいたいし、そうする方法も知れて、よかったです。ありがとうございます。	手話で話すのは、少し難しそうだなと思ったけれど、簡単な手話を覚えて、少しだけ手話でお話したりはできるのではないかなと思います。文字を書いたり、スマホにうつたりして、お話したりもできるので、耳の不自由な方たちとも仲良くなりたいたいし、そうする方法も知れて、よかったです。ありがとうございます。	お二人共、すごく多形で、活発な方だったので、障がいのある方々の進む進路など様々な可能性に関する障壁を無くす必要があると感じました。また、障がいのある方も私達と同じで、色々な趣味や才能を持っているので、気があったりすることも多いのではないかと思いました。なので、体が不自由な人ともそうでない人とも国や文化、歳が違っても仲良くしたいと思う。
7 とても理解を深めることができた	学校の授業（交流体験）を通して視覚障害について教えてくれてありがとうございます。私はこれまで視覚障害のある方が困っている様子でもどどのように声をかければいいのかかわからず何もできませんでした。今は困っている様子だったので、これから気楽に話しかけ手助けができたらいいなと思いました。	学校の授業（交流体験）を通して聴覚障害について教えてくれてありがとうございます。私はこれまで手話の重要性に気づけていませんでした。手話を身につけることにより聴覚障害のある方たちと話すことができ、そして困っている様子などに手助けができるなど改めて気づくことができました。なので今後少しずつ手話覚えていき聴覚障害のある方とも話すことができたらいいなと思いました。	学校の授業（交流体験）を通して聴覚障害について教えてくれてありがとうございます。私はこれまで手話の重要性に気づけていませんでした。手話を身につけることにより聴覚障害のある方たちと話すことができ、そして困っている様子などに手助けができるなど改めて気づくことができました。なので今後少しずつ手話覚えていき聴覚障害のある方とも話すことができたらいいなと思いました。	私は今後、障害のある方と気楽に話せるように手話や声掛けなど積極的に行ってたくさん話を話したいと思っています。また私が今できることを考えて思いつかないこともあろうと思うので調べたいなと思います。そうになり関わっていければいいなと思います。そして考えたことや調べたことを活かして行動したいと思っています。
8 とても理解を深めることができた	細かいことまでしっかり話してください、楽しく話しているように見え私も楽しくお話を聞くことができました。	手話を見てみると、会話ができていて私も手話を習いたいななと思いました。クイズ楽しかったです！	手話を見てみると、会話ができていて私も手話を習いたいななと思いました。クイズ楽しかったです！	今回の交流体験を通して、障害のある方の目線からもっとこうしたいほうがいい、という意見がわかったので、誰もが暮らしやすい社会を築いていくために今後の総合的活動にこの意見を入れていきたいなと思います。
9 とても理解を深めることができた	目が見えない生活はとて大変だと今回の交流で改めてよくわかりました。なので、渡邊さんもおっしゃっていた点字が書かれた商品や本がもっと増してほしいと思います。	手話について理解を深めることができました。テレビでたまに手話をしているのを見ますが、僕は全く何を表しているのかわかりません（笑）なので、手話を覚えていきたいと思います。	手話について理解を深めることができました。テレビでたまに手話をしているのを見ますが、僕は全く何を表しているのかわかりません（笑）なので、手話を覚えていきたいと思います。	自分はいま障がいを持っていませんが、障がいを持っている人とは関係ないと思わずに優しく接し、理解を深めることができるようになりたいなと思います。
10 とても理解を深めることができた	視覚に障がいがあるからこそ見えてくるものがあるというのを聞いてすごく感動した	手話は手だけではなく体全体で表現して相手に自分の気持ちを伝えるのはとてもいいなと思いました。	手話は手だけではなく体全体で表現して相手に自分の気持ちを伝えるのはとてもいいなと思いました。	障がいを持っていない人だけでなく社会全体で取り残されてしまっている人に手を差し伸べられるようになりたい
11 とても理解を深めることができた	点字に触れながらお話をしてくださったことに驚きました。僕たちが身近に感じるようなクイズ（信号や駅 等）が関心を持ちやすく面白かったです。ありがとうございます。	通訳の方と手話でお話されていたことに驚きました。鈴木さんは、「ありがとうございます」の手話をたくさん使っていましたので、僕も覚えたいよ！クイズも実際に実物を見せられて嬉しかったです。想像しやすく楽しかったです。ありがとうございます。	通訳の方と手話でお話されていたことに驚きました。鈴木さんは、「ありがとうございます」の手話をたくさん使っていましたので、僕も覚えたいよ！クイズも実際に実物を見せられて嬉しかったです。想像しやすく楽しかったです。ありがとうございます。	障がいをお持ちの方は、僕達と比べて、困っていると思うので、町中で少しでも、困っている素振りを買たら手を差し伸べて声をかけてあげたい。それが、僕の僕に出来ることです。
12 とても理解を深めることができた	様々な道具を駆使して会話ができるということに気が付かされました。	手話が素晴らしいかったです、相当勉強を積み重ねた証だと思います。	手話が素晴らしいかったです、相当勉強を積み重ねた証だと思います。	温かい心を忘れないうようにする
13 とても理解を深めることができた	実際にお話を聞いて、自分が疑問に思っていたことや知らなかったことを知ることができました。渡邊さんが実際に使用しているものもを見せてもらい「こんなものもあるんだ」としてることが増えました。もともと視覚障害のある方に寄り添ったものが増えていくといいと思います。私も外にいるとき「こんな工夫はどうだろうか」と考えていきたいです。困っている方がいたら積極的に声をかけたいです。今回はありがとうございます。	実際にお話を聞いて、自分が疑問に思っていたことや知らなかったことを知ることができました。電車などのアナウンスを聞くことができない分SNSを利用していることを初めて知りました。若者がSNSで発信していることが少しでも役に立っていると思うといいなと思いました。私が通っていた小学校で学年のみんなの手話を少ししか手話を知らないけどこんなことがきっかけで聴覚障害の方とお話することができたらいいなと思います。今回はありがとうございます。	実際にお話を聞いて、自分が疑問に思っていたことや知らなかったことを知ることができました。電車などのアナウンスを聞くことができない分SNSを利用していることを初めて知りました。若者がSNSで発信していることが少しでも役に立っていると思うといいなと思いました。私が通っていた小学校で学年のみんなの手話を少ししか手話を知らないけどこんなことがきっかけで聴覚障害の方とお話することができたらいいなと思います。今回はありがとうございます。	障壁を持っていない方も持っていない方も使いやすい施設やいいアイデアが増えていくといいなと思います。困っている方がいたら積極的に声をかけたり手助けをしてください。

14	1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。 14 おおむね理解できた。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。 おおむね理解できた。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。 今日は実際にお話を聞くことができ、ありがたうございました。視覚障がいの方から貴重な体験を聞くことができました。困っている視覚障がいの方がいらしたら、積極的に手を差し伸べたいと思います。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩一さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。 今回は貴重なお話を話していただきありがたうございました。僕はいつも生活してる中で、あまり聴覚障がいをお持ちの方のお話を聞く機会が少なかったので、とても考えさせられる内容でした。特にお話の中にあった聴覚障がい者の家の音が大きいということなどは驚きました。今回僕が感じたことは例えば電車の中などで手話で話している人がいれば、自然と見てしまいます。しかしこれは手話で話している人が人数が少ないというだけではない他の人と同じように会話をしているだけなのです。本人は悪気はなくとも他の人では受け取り方が違うということがあると思います。障がいの有無に関わらず、共に生きていくことのできる社会が自然だと思えます。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。 思います
15	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	視覚障害者の人は見かけたことはあってもどんな生活をしているのか全く知りませんでした。しかし今回の交流でその生活について深く知ることができてよかったです。	音が聞こえなくても様々な努力をすることで通常の生活を送ることができていることに感動しました。これからも聴覚障害について多くの人に語り継いでください。	この世界には様々な人がいて生まれつき障害を持って生まれたり、子供の頃に障害を持つ人がたくさんいるということがよくわかりました。健康に生きられていくことに感謝しながら、今できる最大の努力をして社会に貢献したいと思えます。
16	おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	見えないから点字を覚える必要もあるし、出かけるときは細心の注意を私を私わなければならない。他の人の何倍も疲れるしすごくしんどいと思う。それでも、明るく私達を笑わせてくれるような渡邊さんは本当に素敵な方だと思う。	音を聴いたことがないけど話していたけれど、普通に会話をしている感じが思えた。普通に会話でできるまで何度も練習をしてきたんだなと感じ、鈴木さん達の努力に比べれば、私の努力なんてちっぽけなものだなと思った。	目が見えないことも耳が聴こえないことも自分ももしそうならたまたまこく怖いし、最悪生きていけないかもしれない。だけど、渡邊さんも鈴木さんも大変なこともあると言っていたけれど笑っていて素晴らしいなと思った。これからは、渡邊さんや鈴木さんを見習いもっと努力していこうと思う。
17	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	なんで視覚障がいを持ったのかなど渡邊健一さんにとや視覚障がいのことについて知れたから良かった	聴覚障がいの辛さもこの授業を通してわかったのでもよかったです	障害のある方との壁？をなくすことを意識して関わっていく
18	おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	色々な道具や自分が本心に体験した内容を深くお話ししてくれた事によりインターネットで調べることよりもすごく現実味を感じるような体験でした。	障害がある中でも大学に行っていたりと自分がやりたいうことをやっていても感動しました。	やっぱり少しでも困ってほしいという人がいれば声をかけてあげたりと自分ができるところからやろうと思えます。
19	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	視覚障害のある方ならではのどき事や経験などが聞けてこれからの学習にも活かしていきたいと思えました。	今この状況で大変だと思うし、苦勞することもたくさんあると思うけど頑張ってほしいと思えました。	思います。まだ私には知らないことがたくさんあるけど、これからたくさん知っていきたいしもう障害のある方に出会ったらどうしたらいいのかを考えていきたいなと思えます。
20	おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	信号やオセロ、食品など最近ではどこでも視覚障がいのある方がわかりやすいように工夫されていることがわかりました。でもまだ音の出ない信号機だったり、点字のない道、食品などもあることがわかったから、誰もが暮らしやすく、使いやすくなれるために今の自分に、将来の自分にできることを考えたいなと思えました。	自分は小学校のときに1度手話を学んだときに、手話で本当に難しいことを実感したのに、鈴木さんは小さい頃から手話を自然と覚えたと言っていてすごいなと思えました。	障がいのある方もない方も差別なく楽しく生きていくべきだと思えます。
21	おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	目が見えなくて困っていること以外の話も知ることができました。	今まで音を聞いたことがないと言ったことを聞いたときすごく驚きました。	困っている人がいたときはどう困っているのかを聞いて助けようと思えました。

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができました。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができました。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木英彰さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
22 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	電車のホームから頭から落ちたという話を聞いてとても恐怖を感じました。見えにくいから落ちやすく、きけんであることがわかりました。そして渡邊さんが仰っていた通り、駅のホームのところにドアがつくとそういう事故がなくなってしまうので増えたいと思って私も思いました。この交流で色々な事を学べてとてもためになりました。ありがとうございます！	手話は地域によって違うところもあるという話を聞いて少し驚きました。そしてクイズでは、老若男女の眼鏡がポロポロなのは顔の近くで手話を学べたからだと分かりました。この交流で色々な事を学べてとてもためになりました。ありがとうございます！	自分も社会と関わって障がいのある方々が暮らしやすい世界を積極的に考えていきたいと思いました。
23 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	クイズなどの楽しさを交えつつ真面目な話を聞くことができとても貴重な体験になりました。視覚障害を持つ方々の大変なことなども詳しく聞くことができこれまでの生活に生かしていきたいと思いました。有難うございました。	聴覚障害とはどんなものなのかを初めて詳しくお話を聞いて、色々大変なことや苦労することがあると知り自分ができていることは率先してやっていたいなと思いました。貴重なお話をしてくださりありがとうございます！	自分には何も障害を持っていないけど苦労することがたくさんあるのにもかかわらず、障がいを持っている方々もずっと苦労しているのだと考えるととても大変なんだなと思いました。なのでこれからは何も障害を持っていない私達が障害のある方のサポートをして生活していくことが大切だと思いました。
24 おおむね理解できました。	おおむね理解できました。	視覚障害を持つについても前向きに生きていこうということができました	手話を活かし交流をしているのがすごいいいと思った。	障害があっても同じ人、だから同じように接していいかなと思います。
25 おおむね理解できました。	とても理解を深めることができました	視覚障害のある人はどのように生活しているのか知ることができました	聴覚に障害がある家でうろたえていることなど知らなかったことがありました。	障害のことを理解して接する
26 おおむね理解できました。	とても理解を深めることができました	とても身になるような授業でした	聞こえないと大変なことについてわかった	隔てなく接してあげる
27 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	視覚障害の方が困っていることや助けてほしいところがわかったのでこれからの学習に繋げていきたい。	口の動きを似て、言っている言葉がわかるってすごい技術だと思いました。貴重な体験ありがとうございました。	社会の中で障害を持っているかたを見つけたら、率先して助けようと思う。
28 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	何をすることも道具を使わないと見えないということを考えたら、とても生活が大変だったんだなと思いました	聴覚障害者は日によって耳が聞こえやすい、聞こえないということがあることを初めてわかりました。	自分自身ももっと障害について学んで理解を深めていくべきだと思います。
29 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	生まれつき弱視なのに、自分なりに努力して生活していると聞いて感動しました。	小さい頃から表情で判断してすごいいいと思いました。お忙しい中ありがとうございます。	障害があるからって差別なんかせず、理解した上で、ともに支え合っていくことが大切だと考えた。
30 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	勉強が難しくてもがんばるところが感動した。目が見えづらいのにより頑張るところが感動した。	お忙しい中ありがとうございます。	今日学んだことを生かして未来の社会生活で生かしていく
31 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	全盲までの経緯を自身の生活を通して教えていただいたり、強くなった。ホームに落ちるのは少し衝撃があったけど、一駅でも多くの駅に点字ブロックがつくことを願っています。	渡邊さんと同じく、自身の生活をもとに話をしていたら強くなった。聴覚障害がある方もスマホを使うことは初めて知った。段々と障がいのある方への考慮があつて良かったと思った。手話も学習してみたい。	自分の力だけでなく建物や点字ブロックをつけることはできないから、いまは、障がいのある方に会ったときに自分ができていることをもう一度よく考えて、すぐに行動に移せるようにしたい。また、今よりもっと障がいについての意識を向けて、多くの方が楽しいことや苦しいことがあることを理解し、身近であることだと考え、向き合いたいと思う。
32 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	実際に使っているモノなどを、紹介しながら話したので、とても解りやすかったです	ろう者など、色々よかったです 災害時、もし聴覚しようがいの人いたら声をかけてあげるようにしたいと思います ありがとうございます！	しようがいしやの人が、ここが危ないなあとおもうだしように目を向ける
33 とても理解を深めることができました	とても理解を深めることができました	横断歩道を渡るとき、音が聞こえないまわりが危ないという考えが、体験した方しかかわからない、貴重なお話を聞いた。	コロナの影響で、手話での会話がしにくくなっていていそいそ・・・と思っていた行動が細い動作を工夫することでカバーしていきやすいなと思った。	今回実際に話を聞いてみて、体験した方ではないと分らないこととをより政策に盛り込んで行けば、どんな人でも安心して暮らせる街を作ることができるとは思えないかと思った。

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができました。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができました。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
34	とても理解を深めることができました	ありがとうございます。視覚障がい者と話したことは今までもありませんでしたがクイズなど一緒に楽しむことができました。ですコロナ禍で大変なこともあるかと思いますが頑張ってください！	ありがとうございます。僕は少し前に「聲の形」という映画を見ました。その映画で僕の聴覚障がい者に対する意識が変わりました。障がい者についてはあまり知りませんができる限りのことをしていきたいです。	障がい者は不便なことが色々あるので手伝えることができる僕達が頑張っていかなければいけないと思う
35	とても理解を深めることができました	教師をされていたという事実には驚きました。障害持ちの方でもできる職種がこれから増えていくといいですね。	手話で話されている時、とても素早く手を動かして、疲れそうだなと思っていました。	一人一人が関わることと作られる社会の恩恵を貰って生きているので関わるべきだと思いますがそれは置いてどう社会と関わっていくべきかの違いはありますか？
36	とても理解を深めることができました	目から情報を得られないため、それ以外の感覚を大切にされていることがよくわかりました。私が驚いたのは、スマホが使いやすいというお話です。確かに表面はツルツルしていますが、見ないとわからないことがたくさんありますが、渡邊さんのような方にとっては使いつらいものなんでしょうか。他にも、今回お話を聞かせて勉強になったことがたくさんあります。貴重なお時間をありがとうございます。	情報を得る際はツイッターなどスマホを使う、ということに驚きました。今まで私は有名人の投稿しか見てこなかったのですが、スマホを使えば電車がおくるといような情報がはやく伝わって来るなと思います。それまで私は、聴覚障害のある方は新聞を使って情報を得ると思っていたのですが、たしかに新聞よりスマホのほうが早く、そして色々な分野の情報を得られると思います。とても勉強になりました。貴重なお時間をありがとうございます。	お二人の話を聞いて思ったのですが、当たり前ですが聴覚障害のある方も視覚障害のある方も違います。ただそれだけではなく、同じ障害の方を持っている方でも人によってその重さは違いますが、障害を持っているから、〇〇障害だから、というように区別するのはなく一人ひとりの個性と向き合っていくことが大切なのかなと思います。
37	とても理解を深めることができました	今までそう思っていたことが実際は違っていたり白状にも種類があることを知ることができました。	なかなかコロナ禍で伝わりにくいく中、聴覚障害のなかでも一対一なら分かるという方や全く聞こえない方など人によってコミュニケーションの仕方が違うことに気づけました。	駅などで困っていたり危ないとかんじたら率先して声をかけられますように心がけたいです。
38	とても理解を深めることができました	視覚障害の種類、見え方の違いなどをわかりやすく丁寧に説明してくれてありがとうございます。また、渡邊さんのバリアフリーに対する願いを聞いて障がいのある方の願いが叶いみんなが暮らしやすい街になればいいなと思います。	聴覚障がいの方たちは、会話をするとき相手の表情をよく見て会話をしていることを知れたので聴覚障がいの方と話すときは、表情が伝わりやすいようにして沢山話したいなと思いました。	渡邊さんが駅のホームから落ちたという話を聞いて周りに一緒に歩いきましようかなど声をかけてくれるような人はいなかったのか、声をかけていけばホームから落ちなかったのではないかと思、私は視覚障がいの方だけでなく鈴木さんのような聴覚障がいの方、それ以外の障がいをもっている方を見かけたら声をかけ、少しでも生活していく中で不安な点が減るよう、また心の壁を作らずに関わっていくべきだと思います。

<p>1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができました。</p>			
<p>2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができました。</p>	<p>おおむね理解できました。</p>	<p>とても理解を深めることができました</p>	<p>とても理解を深めることができました</p>
<p>3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。</p>	<p>道具を使いこなすのが大変そうだなって思いました。</p>	<p>ありがとうございます。駅での危険なところや信号機の音など気になっていたことだったので知ることができてよかったです。貴重なお話を聞くことができてすごく勉強になりました。視覚障害とはどういふものかなどがわかりました。高校の先生を少しやっていたと聞き、すごいなと思いました。最近では音声ガイド、女性や男性の声でどっちのチームに入ったのかわかったり、声が高いと低いなどで駅でどこにいますのかわかりました。私も駅に行ったりがされて聞きたいと思いました。最近では昔に比べて分かりやすくなっているところや危ないところなどがあることなどがお話を聞いてわかり、そういうところも減ることも減るといいなとおもいました。クイズとても楽しかったです。色々知ることができました。本当にありがとうございました。</p>	<p>この度は貴重なお時間いただきありがとうございます。目が不自由のなか、不安等があると思います。でも工夫してより良い生活しているのがすごいなと思います。</p>
<p>4. ゲストティーチャーの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。</p>	<p>字幕などがあれば結構スマホが使えるんだなって思った</p>	<p>ありがとうございます。小さな頃のお話を聞いて4歳のときに小学校と選んだと聞いてすごいなと思いました。私だったら選ばないなと思いました。クイズがメガネの問題の答えが1番でとてもびっくりしました。手話をすると聞きひっくり返りました。飛んでしまおうと聞きひっくり返りました。また、手話をするときには手、肩、顔を使って話していることがわかりました。同じくらしい人でも、人によって障害というものが違うということがわかりました。SNSなどを活用して情報を与えたりして放送などが聞き取れないときにこういう工夫をしていることがわかりました。最近ではテレビや映画などの字幕、手話などを使ったりして生中継の会見などがあることがわかりました。少しずつ便利にはなっているけどまだ不便なことなどがあることばかりです。貴重なお話をありがとうございました。色々知ることができました。本当にありがとうございました。</p>	<p>この度は貴重なお時間いただきありがとうございます。耳が不自由のなか、会話がうまくいかない、今の御時世マスクをしているとなおさらコミュニケーションを取りづらく感じていると思います。しかしいろいろな方法を乗り切っています。すごいなと思います。</p>
<p>5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。</p>	<p>僕のクラスに発達障害の子がいました。僕はがきんちよだったので、全員と仲良く接してました。理由はどっちもドラえもん好きだったからです。ですが四年生頃になるとその子がいいじめられだしてしまい最終的には不登校になってしまいました。理由はやめとけとけといつも全くやめなかつたからという点と発達障害でもいい人はいっぱいいいイメージを持たれていることが多いです。た。（小学校のときにきいた）そこから差別がうまれていじめに繋がると思いました。今総合の時間にやっているとSDGsの10番の人や国の不平等をなくそうにしているかと思いましたが、レオくんを始め渡邊さんや鈴木さんなどのお話を聞いて人生毎日楽しく過ごしていると感心しました。だからあの子も元気で楽しく生きているのかなって思いました。障害を持ってた人や、妊婦さんなどはヘルプカード、マークということがあるんですがそれを見かけたら助けたり席を譲ったり障害をもった人など高齢の方などに優しく臨機応変に対応したほうがいいんだなって思いました。</p>	<p>やっぱり差別などをしないでどんな人でも変わらざることを大切だと思えます。（障害があってもみんなと同じ人であるからです）今回学んだことなどをいかして色んな人と関わるにはこういうことがあるということを知ることができたと感じました。</p>	<p>自分は障がいじゃないから関係ない。ではなく自分自身を身近に考えて行きたいと思っ。困ってる人がいたら助けるのが一番いいがなかなか行動に移すのが難しいからまず初めにこのような体験や、障がい者理解を深めていききたいなと思っ。</p>

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
42 おおむね理解できた。	おおむね理解できた。	目が見えない人は何も無い人と何もかもが違うと思うだけで同じところがあったからです。	小さい頃から色々なことがあって、大変だったのだからうけどそ俺を感じさせないような雰囲気だったので、聞いていて楽しかったです。	おもいます。
43 おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	「視覚障害」と言われると目が全く見えないうと思ってしまうがそうではないと、複数の種類がある事が分かってきました。また、生活して行く上で改善してほしい点について理解できました。視覚障がいをお持ちの方が暮らしやすい社会になることを願っています。ありがとうございました！	聴覚障害を持つ方は手話を使うことが多いと聞きました。手話を使っている場面を見て、凄く難しく感じました。私の友達に補聴器を使っている子がいますが、鈴木さんは補聴器を使っているか聞いていたのですが、どのようになっていますか？気になりました。今回はありがとうございました！	自分と違うからと言って差別をしてはいけないと強く感じました。今回、お二人のお話を聞いて日常生活で不便な点が分かりました。駅のホームや日用品に様々な工夫がされていますが、課題はまだまだ沢山あります。「誰もが暮らしやすい社会」を目指す為に自分が出来る事から取り組みたいと思います！
44 とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	今まで私にとって目の見えない生活は想像もつかないような世界でしたが、今回渡邊さんのお話を聞いて障害のある生活についてたくさんを知ることができました。お話の中で一番心に残っていることは、生活を支える様々な道具についてです。文字を拡大するルーペや点字のある本や楽譜など色々な種類のものがあることを知りました。けれど、私が生活する中で点字がついているものはあまり見かけません。もし、自分が今視覚障害の立場になったら不便なことだらけだと感じました。今回のお話でバリアフリーの大切さ、必要さについて学ぶことができました。	今回鈴木さんのお話を聞いて聴覚障害についてたくさん理解することができました。特に、緊急時に携帯電話のツイーターで情報を集めていると聞いたときすごく驚きました。私にとっては、「電車がとまると」「事故が起きた」などの情報を誰かが投稿している必要のないと思ってしまうます。けれど、聴覚障害の方にとっては情報は得る上で大切なものになっています。そのことを知ったとき知らぬうちに誰かを助けていて、支え合っている社会はすごく良いなと感じました。鈴木さんのお話を聞いてバリアフリー以外にも障害者のために今自分のできることをたくさん学ぶことができてきました。	これからの生活で困っている人がいたら声をかけたいです。もし、視覚障害者や聴覚障害者の方だったら、今日学んだことを生かした対応をして助けてほしいです。また、障害についてもっと学び障害者理解を深めたいです。
45 とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	授業も周りの友達と同じように勉強するためにルンベを使ったり点字を覚えたりと小さい頃から私が思っていた以上に大変な思いをされてきたんだな。と感じた。	話すことにも通訳さんがいて一つ一つの手話を覚えなくては行けないし外に出る際も何の音も聞こえないのが怖いなと思いました。	視覚障害、聴覚障害の方たちの不便さや大変さをあらためて知ることで周りで周りに見かけたら状況をみて判断し、積極的に声をかけて手助けしてあげたいなと思います。
46 とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	今自分が知らない物を健一さんなりに工夫していたのがびっくりした	手話で話すと手と顔だけだと思っただけ、肩も使っているって初めて知りました。手話には、色々な種類があるということも初めて知りました。	お互い認め合って関わりたい
47 とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	視覚障害者の方が使っている道具は、白杖しか知らなかったけれど他にも使いやすいように工夫されている道具があると知りました。スパーに点字が付いているハム、ペーコン、他にもオオセロ、ピンゴの紙、点字付きの本などもあったと知りました。	手話で話すと手と顔だけだと思っただけ、肩も使っているって初めて知りました。手話には、色々な種類があるということも初めて知りました。	街なかでこまっている方がいたら積極的に声をかけたいと思います。
48 とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	健一さんが実際に体験した目が見えない恐怖がよくわかり、点字ブロック・音付きの信号機などは視覚障害者の方にとっても重要なものだなと思いました。また、健一さんが高校の先生をやっていたのは驚き、本当にすごいなと思いました。健一さんがおっしゃっていたバリアフリーの夢の話で、スパーの商品で点字が付けられている商品がペーコンしかないという思いで悲しい気持ちになりました。この社会にバリアフリーでデザインももっと増えれば良いなと思いました。私はこの貴重な体験を活かして、障害のある方が過ごしやすい世の中になりたいと思います。今回は貴重な体験ありがとうございました。	手話を覚えるのは重要でもあるし大変なのだと感じました。私は、手話に言語があるのは初めて知りそれぞれ表現の仕方が違うと聞いて驚きました。手話は相手に気持ちを伝えるための大事な手段だと思い、手話のすきさがよく分かる体験になりました。私が途中で障害がある方（困っている場面）を見かけたら進んで助けにいきたいなと思います。今回は貴重な体験ありがとうございました！	障害がある方々が困っていた時積極的に助けに行きたいと思えます。また、様々な方がこの世の中が住みやすくできる様に自分で考えて行動していきたいです。

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができました。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができました。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木彩一さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
49	とても理解を深めることができました	なかなかに聞けないような体験談を聞いて、あつという今に時間が過ぎてしまいました。個人的に一人暮らしをしていてということにとっても驚きました。また、はなしいしを聞いていても、マイナスなことを全くと言っていいほどおっしゃっていらっしゃいます。改めて、貴重なお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。	なかなかに聞けないような体験談を聞いて、あつという今に時間が過ぎてしまいました。個人的に手話を駆使して会話する際に全身を使うというところ、国によって手話が異なるということに衝撃を受けました。また、はなしいしを聞いていても、マイナスなことを全くと言っていいほどおっしゃっていらっしゃいます。改めて、貴重なお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。	障害の有無関係なく対等に接し、障害によって生まれるバリアをフリーにすることが大切だと思った。また、今回の学習を今総合の授業でやっていく活動に最大限に活かし、自分たちでできることを試行錯誤したい。
50	とても理解を深めることができました	障がいがあったとしても生活面で工夫していることがたくさんあって驚きました。渡辺さんのお話、クイズを通して発音がたくさんありました。現在行っている総合の時間で参考にしてみます。今回はありがとうございます。	手話を使うにあたって、手だけではなく、全身を使って相手に伝えるんだなと思いました。今総合の時間で、新聞づくりをしていて、日常生活で困っていることなどお話をさせていただけてとても参考になりました。今回はありがとうございます。	障がいのある方でも見ただけでは分からなかったり、あまり相手に理解されなかったりと、苦しんでる方もたくさんいると思います。もし困ってそうだなと思う話を聞いたり、クイズに参加しようになります。今回お話を聞いたことのない工夫をしていて驚きました。総合の学習で新聞にまとめていっている最中なので、参考にして、障がいのある方でも安心して過ごせられるように取り組みたいです。
51	おおむね理解できました。	オンラインだったので伝わりづらいこともあったかと思いましたが、とてもお話しが面白かったです。まだまだ視覚障害についてわからないことが沢山ありますが、私の口から色々な人に伝えていけたらなと思います。今日はありがとうございます。	聴覚障害の方とおはなすのは初めてでした。質問などにも真剣に答えていただき、ありがとうございます。質問にも真剣に答えていただき、ありがとうございます。質問などにも真剣に答えていただき、ありがとうございます。質問などにも真剣に答えていただき、ありがとうございます。	思いました。どちらの方も面白く、とても楽しい時間になりました。これからは今回学んだことを活かして、総合の授業を受けていきたいと思っています。
52	とても理解を深めることができました	実際に質問もさせてもらいましたし、リモートという形での交流でしたが、とても明るく、笑顔で満ち溢れた渡邊さんをみてこちらも勇気をもらえたような気がしました。とても貴重で、内容の濃い時間だったなと思います。これからも不慣れなことなどあると思いますが、渡邊さんの持ち前の明るさで乗り越えてください！僕も何事も諦めず色々なことに挑戦します！本当にありがとうございます！	音が聞こえない、恐怖の世界だと思っています。僕は想像がつきませんが、でもそんな自分の世界を明るく、手話という方法で人とコミュニケーションも取っていただい本当に尊敬します。正直ものすごくかっこよかったです！僕も聴覚障害の方とコミュニケーションを取りたいと心から思ったのでぜひ覚えてみたいと思います！貴重なお時間を頂いて本当にタメになりました！	多様性、バリアフリーの大切さに改めて感じる事ができました。これからは、『誰もが過ごしやすいまづくり』を重点的に考えていきたいです。
53	おおむね理解できました。	弱視のための補助器具ルーペーみみたいなおがどのくらい見えるのか気になる	非平時のときはスマホを利用する事が多かった	障害者と共存できる社会を作っていきたいです。
54	おおむね理解できました。	見え方とか人がよによって変わるのには知らなかったし、見えないから戻ってくるのが参考になった。	ツイッターなどを使い、情報を得たりしているのはすごいとおもったし、生活する中で音ではないものにしていくことを初めて知った。	その人たちから見えないとわからないこと、気づけないことがあるからその人達との関わりを構やしていくべきだと思った。
55	とても理解を深めることができました	渡邊さんの話を聞いて、今の自分なら当たり前でできるとも、こんなにも不便になるんだと思いました。渡邊さんの話を聞いて、改めて世界にはまだまだ課題があることを理解しました。でもこんなふうにならずに少しくづいていっていったら、きっと世界にも伝わると思いますが、渡邊さんありがとうございます。	鈴木さんお話しが面白いというハブニングが方しか写らないというハブニングが方ありましたが、楽しんで聞かせてもらいました。クイズもとても楽しかったです。ろう学校での話はどう者同士のちがいがいなど、面白い話を聞かせてもらいました。特に手話がろう学校では使えないのも驚きました。鈴木さん本当にありがとうございます	社会での課題はまだたくさんあります。そして今ではできることも限られています。でも、障害者の理解を深め、間違った見識を正す事はできます。

56	1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩一さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
57	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	何も見えない世界の中でもしっかりと勉強をし、大学院なんかにも行ってしまうところすごいと思った	聴覚を持っていてる方の意思疎通の難しさがよくわかった	思います
58	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	目が見えなくてもいろいろなことに挑戦していかっこといいと思った	直接話している言葉が聞こえなくても手話などを通して交流でき良かった また、簡単な手話などを少し覚え自ら交流の幅を広げたいと思った	自分自身が障害への理解を深め、力になれるようにする
59	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	普段の生活で感じていることを深く知ることができ目が見えなくてもできることはたくさんあるということがわかりました	困っていることなど詳しくしれた。	一人ひとりと感じる事などが違っていた
60	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	聴覚障害のある方からのお話でいつもとは違う視点で考えることができたので良かった	今まで分からなかったことがたくさんわかったので勉強になりました	もっと積極的に障害と向き合っていきたいです
61	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	聴覚障害者は目が見えなくても他に聴覚障害者になることも他にも困ったことがあることがわかった	聴覚障害は話すときは手紙や書くようなイメージがあったけど手話で話していることがわかった。	現在障害を持っている人はたくさんいるのでいるんなら人のことを考えて社会と関わることが大切だと思う。
62	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	点字についてわかりました。	聴覚障害は話すときは手紙や書くようなイメージがあったけど手話で話していることがわかった。	視覚障害者や聴覚障害者やその他様々な障害を持っている人を助けたいと思った
63	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	自分の祖父も目が悪く、治療を繰り返しているから今回でまた祖父に対する考え方が変わった	手話の大切さを知りました	自分でできることを全力でやりたいです
64	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	視覚障害のある方々のための工夫はいつも自分が気づかないだけでたくさんあって、視覚障害のある方はそれを利用して生活をしていることがわかった。	光や振動などの衝撃を感じやすい。だからそのなかでできることがありそう	大前提として見た目で決めない、差別意識を捨てる
65	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	全盲は視界が真っ黒なのかと思っていたが、真っ白であることを初めて知った。	聴覚障害のある方は生活の中で不便なこともあるが、いろいろな工夫をしてそれを乗り越えていることがわかった。	障害のある方は普段困ることもたくさんあり、人によって困ることは違うと思うから、そのことも意識して関わっていくことが大切だということがわかった。
66	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	・最近、歌のホームの扉がだいぶ普及してきたなと思っていたが、お話にあっただよ ・通路が肩幅ぐらいいの扉もまだあるということなので、みんなが住みやすい街になるのには、多くのお金と時間が必要だということに改めて感じた。	・通訳の方も交えることにより、ふつうのひのひのうに会話ができることに驚いた。 ・聴覚障がいを持つ方には誰かがそばにいてあげることが、大きな助けになることを感じた。	自転車をしっかりと位置に置いたり、困っている様子だったら声をかけてみたりというように、ささいな気遣いをすることがより良い社会につながると思う。
67	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	目が見えないから絶対音感などの他のもので補っていることがわかった。渡邊さんの体験談を聞いて苦労してきたことがわかった。	耳が聞こえないのに喋ることができていて、努力をしてきたことがわかった。	障害があるなしではなくみんなで協力していくことが大切だと思った。
68	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	普段使っているものなどを詳しくお話されていて、とても面白かったし学ぶものがたくさんありました。	緊急時に利用するというものを知られて良かったです。	誰もが使いやすい社会をまずは自らの力で実践していく。
69	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	今思っている以上にたいへんなことがあるんだなとおもいました。	普通に友達とかと会話できない辛いことがあるんだなと思いました。	この交流を通してひとを助けられる自分になろうと思えました
70	あまり理解を深めることができなかった	あまり理解を深めることができなかった	いいお話を聞けてよかったです	いいお話を聞けてよかったです。	障害のある方もない人も同じように関わっていきたい
71	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	目が見えないからこそ見えてくるものがあるんだなと思いました。	手話は手で話すとかいてあるけど全体でやることわかった。	全員に対して平等に優しく

72	1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。	おおむね理解できた。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。	とても理解を深めることができた	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	視覚障害のある方から「なにかできることがありますか？」みたいなことを聞いていきたいと話を聞いて思った。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩一さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	ゲストティーチャーの鈴木美彩一さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
73	おおむね理解できた。	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	今回の授業で聴覚障害者がどのような生活をしているかがわかってとても良かったです	今回の授業で聴覚障害者がどのような生活をしているかがわかってとても良かったです	障害のある方など困っていたら声を積極的にかけたいかなど	今回の授業を今後の生活に活かせるようにしていきたい	はいいいと思います どんな人でも誰かが困っていたら声をかけてあげよう
74	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	本やネットでは知れない、視覚障害者についての色々なことが聞けてよかった。	本やネットでは知れない、視覚障害者についての色々なことが聞けてよかった。	みんな人でも親切に接したい	みんな人でも親切に接したい	みんな人でも誰かが困っていたら声をかけてあげよう
75	おおむね理解できた。	おおむね理解できた。	おおむね理解できた。	おおむね理解できた。	目が見えない方のお話を聞いて障害があってもなくてもみんな幸せに生きられたらいいなと思いました	目が見えない方のお話を聞いて障害があってもなくてもみんな幸せに生きられたらいいなと思いました	聞えない中発音を覚えるのはすごいなとおもいました	聞えない中発音を覚えるのはすごいなとおもいました	聞えない中発音を覚えるのはすごいなとおもいました
76	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	自分なり工夫や努力を知り、もし自分が同じ立場であつたらできないことだと思つたので私もバリアフリーがもっと広まるといいなと思いました。また、色々な人の視座について考えることでまだまだ改善すべき点があるなと参考になりました。この度はどうもありがとうございました！	自分なり工夫や努力を知り、もし自分が同じ立場であつたらできないことだと思つたので私もバリアフリーがもっと広まるといいなと思いました。また、色々な人の視座について考えることでまだまだ改善すべき点があるなと参考になりました。この度はどうもありがとうございました！	いろんな質問やクイズを通して学ぶことでこれまで自分が知らなかったことを知ることができたので、とても参考になりました。ありがとうございました。	いろんな質問やクイズを通して学ぶことでこれまで自分が知らなかったことを知ることができたので、とても参考になりました。ありがとうございました。	いろんな質問やクイズを通して学ぶことでこれまで自分が知らなかったことを知ることができたので、とても参考になりました。ありがとうございました。
77	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	今までテレビとかで障がい者の方たちについて、見たり聞いたりしていましたが、特別な道具を使って生活したり、今までに起きたアクセシビリティなどの話が聞けてとてもおもしろかったです。	今までテレビとかで障がい者の方たちについて、見たり聞いたりしていましたが、特別な道具を使って生活したり、今までに起きたアクセシビリティなどの話が聞けてとてもおもしろかったです。	話を聞いていて、スマホを沢山使うことにとってもおどろきました。zoomで話を聞いているときに手話を見て、すごい早い手の動きを見てすごいなと思いました。	話を聞いていて、スマホを沢山使うことにとってもおどろきました。zoomで話を聞いているときに手話を見て、すごい早い手の動きを見てすごいなと思いました。	話を聞いていて、スマホを沢山使うことにとってもおどろきました。zoomで話を聞いているときに手話を見て、すごい早い手の動きを見てすごいなと思いました。
78	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	視覚障害について色々知ることができ、これからのように声をかけたりしたらいいのかなど知ることができたので良かったです。	視覚障害について色々知ることができ、これからのように声をかけたりしたらいいのかなど知ることができたので良かったです。	聴覚障害について色々なことを知ることができたので良かったです。	聴覚障害について色々なことを知ることができたので良かったです。	聴覚障害について色々なことを知ることができたので良かったです。
79	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	私は今まで視覚障がいのある方と関わったことがほとんどありませんでした。ですがこの授業を通してお話を聞いて今までより詳しく知りたくて自分の考えをより視覚障がいのある方に寄り添うような考え方ができるようになつたと思えます。本当にありがとうございました。	私は今まで視覚障がいのある方と関わったことがほとんどありませんでした。ですがこの授業を通してお話を聞いて今までより詳しく知りたくて自分の考えをより視覚障がいのある方に寄り添うような考え方ができるようになつたと思えます。本当にありがとうございました。	私は今まで聴覚障がいのある方と関わった事がありませんでした。だから今回始めてお話を聞いてとても勉強になりました。授業でtwitterで情報を得ていることを聞いてとても驚きました。また手話を会話しているの初めて見てあんまりに速いんだと驚きました。初めての知ったことも多く勉強になりました。本当にありがとうございました。	私は今まで聴覚障がいのある方と関わった事がありませんでした。だから今回始めてお話を聞いてとても勉強になりました。授業でtwitterで情報を得ていることを聞いてとても驚きました。また手話を会話しているの初めて見てあんまりに速いんだと驚きました。初めての知ったことも多く勉強になりました。本当にありがとうございました。	私は今まで聴覚障がいのある方と関わった事がありませんでした。だから今回始めてお話を聞いてとても勉強になりました。授業でtwitterで情報を得ていることを聞いてとても驚きました。また手話を会話しているの初めて見てあんまりに速いんだと驚きました。初めての知ったことも多く勉強になりました。本当にありがとうございました。
80	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	日が出てる時より日が沈む時のほうが見えやすいことや、全音で黒く見えるのではなく白く見える場合もあることなど、知らなかったことをたくさん学ぶことができて良かったです。	日が出てる時より日が沈む時のほうが見えやすいことや、全音で黒く見えるのではなく白く見える場合もあることなど、知らなかったことをたくさん学ぶことができて良かったです。	耳が聞こえないにくくても、手話や筆談、反応を見るなど様々な方法でコミュニケーションを取ることができるといふことがわかりました。	耳が聞こえないにくくても、手話や筆談、反応を見るなど様々な方法でコミュニケーションを取ることができるといふことがわかりました。	耳が聞こえないにくくても、手話や筆談、反応を見るなど様々な方法でコミュニケーションを取ることができるといふことがわかりました。
81	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	私は視覚障害のある方を見かけた時、話しかけたら手助けできたことがなく、少し壁を感じてしまつていたけれど、今回渡邊さんと交流できたことでそれが一切なくなりました。視覚障害についても深く理解できたため、これから視覚障害のある方を助けたときにはいつも通りにコミュニケーションを取りたいなと感じました。	私は視覚障害のある方を見かけた時、話しかけたら手助けできたことがなく、少し壁を感じてしまつていたけれど、今回渡邊さんと交流できたことでそれが一切なくなりました。視覚障害についても深く理解できたため、これから視覚障害のある方を助けたときにはいつも通りにコミュニケーションを取りたいなと感じました。	聴覚障害のある方とのコミュニケーションを取る方法は手話だと知れたので、私も様々な人と繋がれる手話を勉強してみたいと思いました。また、鈴木さんのお話を情報収集など様々なことにスマホを活用していることも分かったり、私はこれこれから物を見る視点を広げ、自分には使いやすいようにしたいと思いました。	聴覚障害のある方とのコミュニケーションを取る方法は手話だと知れたので、私も様々な人と繋がれる手話を勉強してみたいと思いました。また、鈴木さんのお話を情報収集など様々なことにスマホを活用していることも分かったり、私はこれこれから物を見る視点を広げ、自分には使いやすいようにしたいと思いました。	聴覚障害のある方とのコミュニケーションを取る方法は手話だと知れたので、私も様々な人と繋がれる手話を勉強してみたいと思いました。また、鈴木さんのお話を情報収集など様々なことにスマホを活用していることも分かったり、私はこれこれから物を見る視点を広げ、自分には使いやすいようにしたいと思いました。
82	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	日常生活において、音声機能のついた電話など、障害のある方でも生活に支障がでることのない社会にするためにたくさんさんの仕組みがあることを知ることができました。	日常生活において、音声機能のついた電話など、障害のある方でも生活に支障がでることのない社会にするためにたくさんさんの仕組みがあることを知ることができました。	なにか物事を考えるときに、基準を自分たちだけに向けるのではなく障害のある方々も視野に入れて考えている。	なにか物事を考えるときに、基準を自分たちだけに向けるのではなく障害のある方々も視野に入れて考えている。	なにか物事を考えるときに、基準を自分たちだけに向けるのではなく障害のある方々も視野に入れて考えている。
83	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	とても理解を深めることができた	説明がわかりやすかつたので、視覚障害のことについてわかりました。	説明がわかりやすかつたので、視覚障害のことについてわかりました。	困っている人がいたら声をかけてあげたいとおもいました。	困っている人がいたら声をかけてあげたいとおもいました。	困っている人がいたら声をかけてあげたいとおもいました。

1. 障害のある方との交流を通して「障害」について理解を深めることができた。	2. 障害のある方との交流を通して、障害の有無に関係なく誰もがよりよく生きる「共生社会」について理解を深めることができた。	3. ゲストティーチャーの渡邊健一さん（視覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	4. ゲストティーチャーの鈴木美彩さん（聴覚障害のある方）との交流を通しての感想を記入してください。	5. 今回の障害のある方々との交流体験を通して、これから自分自身が社会と関わっていくべきだと思いますか？自分の考えを記入してください。
84 とも理解を深めることができた	とも理解を深めることができた	目の前の世界が真っ暗なかと思うっていたから白色と目という言葉を初めて知りました。幼稚園生で手話が使えたのがすごかったです。ろう通訳という職業を初めて知りました。視覚障害者の方ともお話ができるように手話を使うようになりたいなと思いました。	る者という言葉を初めて知りました。幼稚園生で手話が使えたのがすごかったです。ろう通訳という職業を初めて知りました。視覚障害者の方ともお話ができるように手話を使うようになりたいなと思いました。	普通の人と同じようにお話ができるように私たちが手話を覚えたり点字を覚えたりと努力をしたら良いと思います。障害者の方々だけが頑張るのではなく私たちも頑張ることが必要であると考えました。
85 とも理解を深めることができた	とも理解を深めることができた	渡邊さんの話を聞いて私自身知っていたつもりだった事が多くあくく渡邊さんと交流して視覚障がいについて、理解が深まりました。	聴覚障がいについて視覚障害がいよりも知る機会・自身の知識がなかったので今回手話の種類なども丁寧に教えてもらえたので嬉しかったです。	私自身あまり関わる機会が少なかつたのでこういういった授業でただでなくもっと様々な人と関わり、理解を深め生活していきたいです。
86 おおむね理解できた。	おおむね理解できた。	自分は目の見えない世界というものを体験したことがないけれど安心安全の家の中でも不便な点がいっぱいあることに気付きました。目の見えない方々が暮らしやすい環境というものを私達が率先して考える努力をしようと思います。	手話を行うときに眉毛を使うなどの細かい動きで表すということを知って知ってととても驚きました！！その細かい動きをする方、感じ取る方それぞれがすごいなと思いました。	世界にいるみんなが平等に、楽な生活ができるよう一人ひとりの意見を尊重し自分にできることばないかを考える。（町中で見かけたら優しく声をかけるなど）
87 とも理解を深めることができた	とも理解を深めることができた	全盲だと視界が真っ白になる人もいることを初めて知りました。不便なことも多いかもしれないけどそれを感ぜさせないくらい明くってかっことよかったです!! あまり気づかなかつたのですけれど所々にしか音声信号がなかつたので全ての信号を音声信号にしてほしいですよな。	聴覚障害の人と話をする機会がなかつたので通訳の方を通してだけだと聴覚障害者の本当の気持ちを知ることができてうれしかったです!! Twitterを使うのに驚きました。	不便なことを聞くと、手話とか勉強をたくさんしなくても私達にできることはたくさんあると思うのでそのような人たちが減るようなことをしていきたいです。助けたり、物を作ったり。

とも理解を深めることができた 59 とも理解を深めることができた 76
 おおむね理解できたら 27 おおむね理解できたら 10
 あまり理解できなかつた 1 あまり理解できなかつた 1

第二部

コンファレンス

当事者に学ぶ

クロスアドボカシーコンファレンス

第一部 『共生社会に障害を活かす教育実践』

シンポジスト（五十音順）

菊地理一郎（盲学校教師）**盲当事者**

戸田康之（ろう学校当事者教師）**ろう当事者**

渡邊健一（高校福祉科当事者教師）**盲当事者**

コメンテーター 福島智（東京大学先端科学技術研究センター教授）**盲ろう**

第二部 『障害を活かし、地域で学び、地域で働く』

発題「障害当事者と地域の関わり」

星野孝彦（きよせボランティア・市民活動センター）

シンポジスト（五十音順）

萩原知美（高齢者施設勤務・手話講師）**清瀬市ろう当事者**

星加恒夫（ニュー・ブレイル・システム株式会社社長）**清瀬市盲当事者**

安田恭子（高齢者施設勤務・ケアマネージャー・社会福祉士・薬剤師）

清瀬市車いすユーザー

コメンテーター 田門浩（弁護士）**ろう当事者**



「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学習を促進する地域連携プログラム～セルフアドボカシーからクロスアドボカシーへ」オンラインコンフェレンス

12月4日（土曜）13時～17時

主催：日本社会事業大学 研究代表者：齊藤くるみ（日本社会事業大学社会福祉学部教授）
[オンライン（Zoom）情報は \[kurumi@jcs.ac.jp\]\(mailto:kurumi@jcs.ac.jp\)](https://www.zoom.us/j/91111111111) まで参加申し込みをされた方にお知らせします。

参加無料 手話通訳がつきます。接続の確認ができるように定刻15分前から音楽を流します。その他の支援は事前にお申込みください。

開会：事業の趣旨 齊藤くるみ

プログラム

第一部 『共生社会に障害を活かす教育実践』（13：05～14：40 質疑含む）

学校教育に携わる障害当事者の教師たちが、どんな学びをしてきたか、どんな教育をしているかを語ります。障害当事者が共生や障害を教える意義を共に考えましょう。

シンポジスト（五十音順）

菊地理一郎（盲学校教師）

戸田康之（ろう学校教師）

渡邊健一（高校福祉科教師）

コメンテーター 福島智（東京大学先端科学技術研究センター教授）

司会 田村真広（日本社会事業大学教授）

第二部『障害を活かし、地域で学び、地域で働く』（14：50～16：25 質疑含む）

障害を活かして地域に貢献してきた、異なる障害をもつ三人が、お互いを知り、学び合い、応援し合うクロスアドボカシーを目指します。

発題「障害当事者と地域の関わり」

星野孝彦（きよせボランティア・市民活動センター）

シンポジスト（五十音順）

萩原知美（高齢者施設勤務・手話講師）

星加恒夫（ニュー・ブレイル・システム株式会社社長）

安田恭子（高齢者施設勤務・ケアマネージャー・社会福祉士・薬剤師）

コメンテーター 田門浩（弁護士）

司会 田村真広（日本社会事業大学教授）

進行の状況により、質疑の時間を取ります。

閉会：総括 齊藤くるみ

お申込み・お問い合わせは kurumi@jcs.ac.jp（齊藤）まで。

第一部

齊藤：「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学習を促進する地域連携プログラム」というプログラムには「セルフアドボカシーからクロスアドボカシー」というサブタイトルがついている。

セルフアドボカシーはもう10年以上前から聞かれていたことばで、このプログラムの前身はセルフアドボカシー。

今年度から「クロスアドボカシー」と名付けて視覚障害と聴覚障害者の学びあいをテーマにしている。今まで、聴覚障害者に盲導犬を知ってもらい、視覚障害者に聴導犬について知ってもらった。大変好評をいただいた。今週も、授業の中で、清瀬明かりの会の方々に弱視についてのお話しをしていただいた。ろうの学生、盲ろうの学生が大変興味を持った。手話通訳等、コミュニケーションのバリアを取り払うことで、実は視覚障害者と聴覚障害者は分かり合えるし、相乗効果でもっと素晴らしいアイデアが出てくると確信した。

本日は前半は教育に焦点を当てて、後半は地域で働く違う障害をもつ当事者の方々のバイタリティーで化学反応を起こしていきたい。

皆様何かあったらチャットにてご連絡を。チャットでは難しい方、お申込みのときのメールアドレスで。私が直接返信する。

視覚障害者の方が入られたときに、パソコンの読み上げソフトが聞こえるかもしれないが、視覚障害にご縁のなかった方驚かれないように。通信環境により入りなおす視覚障害の方もいるかもしれない。倍速の声が聞こえて来てもその他の方は気にしないでいただきたい。また万一通信の不具合で、完全に切れてしまったときには、私が立ち上げ直すこともあるかもしれない。その場合はもう一度皆さんも入りなおして。そういうことはまずないと期待する。ではこの後のかじ取りを本学の田村教授にお任せする。

今まさに当事者の先生（ろうの副校長先生）による教職の授業をやっていて、その学生がどうしてもあとから見せてというので、録画をさせていただきたい。公開はせず、取り扱い注意する。

菊地：八王子盲学校教員。今43歳教員歴21年ずっと盲学校で教えている。生まれは宮城県仙台市、先天性の盲ではない。乳児期の病気で全盲。幼稚園は一般の幼稚園、宮城盲学校小学校で6年間。中高6年東京の盲学校。教員養成課程のある大学へ。東京ではなかなか採用されず宮城県で採用された。母校に採用された。2001年のこと。13年館教員をして、東京に引っ越し、八王子に勤務8年目。小学校の先生になりたくて養成課程へ。特別支援の教師ではなく、目指していたのは、見える子を教えたかった。大学3年の時4週間 4年で3週間、普通の小学校で実習。理解のある先生でよい経験をした。是非小学校へと思ったが。なかなか普通の小学校の先生の仕事は多岐にわたり量も多い。ひとりでやるのは難しく周

りもサポートも難しい。思いやりだけでは。

安全管理の問題があって、普通の小学校というのはどうなんだと思われて、希望する一般学校の採用はかなわなかった。盲学校で20年以上たってしまった。今小学部で学級担任をしているので、夢の実現率としてはそんなに目標からはなれていないのかなと思う。視覚障害いろいろな団体があり、全盲ということばも珍しくなってきたが全く見えない。

小さい頃から教育すれば点字。その中で様々な体験をする。なかなか目で見ないとわからないものもある。小学校の教科書は写真・絵が多くて視覚障害のある子どもには理解できない。いかに理解させるかがポイントの一つ。

そういうことを教えるなかで、自分がどういうふうに学んできたかは参考になる。それだけではなく小学校の教員はすべての教科を教え生活指導もしなければならない。保護者への対応、すべての周囲のことに関連することを求められる。オールマイティな仕事をしなければならないなかで、見えない人間が果たす役割は何か。自分が見えないことによっていかすことは有意義であるが、菊池自身は自己実現できないなと思う。

簡単にいうと、自分は見えない人間である前に教員としての力をつけたい。当事者であればだれでも教えられるかということ違う。逆もしかり。自分が初めて採用されたところでは褒められたことではなかった。基本的なことができない状況で運良く採用された。ちやほやされすぎたかな。見えなくても頑張っているね、というところで、まわりになんで評価されないんだろうと思った時期もあり、それは自分に原因があって、力をつけなきゃいけないと思った。磨こうと思い始めた。

小学校の普通の免許で就職したが、盲学校の免許中学二種のための勉強した。一番大きかったのは9年目に宮城教育大学の教職大学院で勉強しなおしたこと。今まで盲学校で、知らなかったことがとても多いと知った。あらためて知識を深めた。自分は盲学校にどっぷりつかって、当事者だから「どうしたらいい?」と聞かれて「助かる」と言われて、向上することを見失いかけていたかなと思う。止まってはいけない、教育に関係する人として幅広い知識を、学ばなければならないと思った大学院生活だった。

お二人の先生と視点が違うかもしれない。本籍地は盲学校だけど、住民票は一教員であり、教員としてどう生きていくかが大事。味付けにはなるかもしれないけど、教員としての力をつける。子どもをどう理解し、どう対話し、どう教えるのが効果的か、それにプラスして自分の経験をつたえること。そこだけになってしまっはいけないと。

今でも盲学校で視覚障害を教えたいからではなく、盲学校のほうが仕事がしやすいから働いている。人数も少なく把握しやすいので。働きやすさが同等ならば、迷わずただの一教員になれたら幸せだろうなと思うが、現実的には難しいので、定年までを考えている。特別な先生だから、道徳とか、ではなく対等な立場の先生として働けたらなと思う。盲学校では、やり甲斐とキャリアとしても、まあ納得している。

田村：一点だけ質問。教職大学院2009年、教員終わって10年目の研修。

菊地：8年目で

田村：公的に？

菊地：学費は自分ではらったが給料はもらえた。二年目は現場に帰って論文を書いた。

田村：では、戸田さん。パラリンピックの手話通訳も拝見した。

戸田：自分は1歳で聞こえなくなって幼稚部だけろう学校、その後は普通学校。

埼玉県で非常勤講師として、始めた。手話に理解のある県でいい環境。幼稚部で一年間、採用試験に通って中学部で指導。そのあと幼稚部に希望してかわった。大宮ろう学園の幼稚部ではたらいて20年になる。埼玉は仕事を始めたときろうの先生は6人、今は30人いる。ろうの教職員が必要だということを行政に働きかけて少しずつ増えた。今年度も2名合格した。情報保障についても大宮・坂戸もどちらも専任の手話通訳士がいる。会議のときにも通訳をしてくれる。大宮は1人、坂戸は2名。通訳のほかにボランティアで通訳をしてくれる人もいて聴・ろう良好な関係。子どもには手話で。あとUDトークも使う。管理職では坂戸ろう学校の福校長がろう者で働きやすい環境。

幼稚部と言えば、人間形成の場として大事な時期。勉強しながら遊びながら、言語を身に着けるのが大事。やはり手話を見るのが大事になる。言語モデルとして自分を見てくれる。アイデンティティをもつことができる。ロールモデル。親に対しても。

教員になってからの学びとしては、教員になったばかりの頃は聴者の世界で生きてきたので、聞こえる人に合わせてきた。ろう学校で先生になって自分自身を見直した。聞こえる先生から習えという価値観が大きかった。自分のアイデンティティを確立しながら教えることが大事と思い始めた。同じろうのこどものアドボカシーを活かすデフフッドという概念を学び始めた。デフフッドというのは障害として見るのではなく、他者と比較するのではなく、存在としてのろう、ろう文化の中で生きていくこと。医学モデルではない、社会モデルでもない。文化言語モデル。今も学んで、幼児教育に結びつけている。教科指導の面も取り入れながら。デフフッドを学んでいるが、良かったことは、自分を見つめなおすことができた。社会モデルは学んでいたが、ろう者としてのアイデンティティを再構築している。

障害の見方を変えていく。保護をする見方が多かったが、デフフッドを学ぶことでろう文化をきちんと教えていかなければならないという責任が生じる。子どもたちに教えていく。ろうの子どもがろうのアイデンティティを身につける。見方が変わる遊び方も変わる。聞こえる子の鬼ごっこでも聞こえないことに合わせて工夫している。デフフッドの効果かなと思う。

これまでは聞こえる教育をそのまま持ち込んでいた。聞こえる先生たちもデフフッドを学んでいる。見る目が変わっている。子どもたちのもつ力を高められる。同じ当事者として、聞こえない意義は何か、先ほど菊地先生もおっしゃっていたように一人の教員としての資質を磨きたいとのこと。その通りだ。音声で教えるのとは違う。手話を言語として、また生活・行動、当事者だからこそできることがある。導いていける。聞こえる教員もいるので、聞こえる先生だけの見方で教えるとうる文化を元に行動しても子どもたちにはしんどい。ろうの教員として、聴の先生が教える分プラス当事者が教えるということで、意味がある。

動画をご覧ください。半円にすわっている。前に私がすわっている。幼稚部の子どもに活動について話しているところです。端にいる男子このことを話している女の子が、私の足をとんとんとして割り込む。聴者の先生は割り込みを、待てない子どもという。聞こえる子どもの世界では待てない子どもという見方。ろう文化の中では、割り込みではない。会話を割って先生を呼んでいるのではない。軽くポンポンと叩くのは意味があって、次に話したいことがありますよ、という意味。次は私にしてね、という意味。これがろう文化。

ろうの先輩は「あるあるという。肩を軽くたたく。それは終わったらこっちを見てねというろう文化。聞こえる人の見方だと本当の意味がつかめない。ろうの当事者としてデフフッドを学ばなければよい効果がでないかもしれない。ろう・聴が学び合うことが大事だと思う。

田村：ありがとうございます。ろう学校の教員何年目ですか。

戸田：19年目。来年で20年。

田村：デフフッドの教育に目覚めて実践を始めたのは何年目ですか。

戸田：3年前からです。

田村：ありがとうございます。つづいて渡邊さん

渡邊：13年前から：相模原市で、ひとり暮らしをしている。出身横浜、エレベーターなしの5階。郵便届ける人は大変。今日は皆大先生で肩身が狭いが。

生まれつき強度の弱視、高校1年で目の前が真っ白になったのを覚えている。小学校で福祉教育を22年やっている。目が見えないってどういう状態まっ暗？と聞かれる。真っ白と答えるとびっくりされる。見えなくても10人十色ですと皆さんに伝えている

総合的な時間で人権教育というのが組み込まれて、そこで話すことが多い。最初は4年生の授業だった。2000年6月。だんだん中高や社会人対象で講座を担当するようになった。教職のゲストもするようになった。幼稚園・保育所の年代以外はほとんど授業の経験がある自己紹介と、教員になるときの苦労とか、まわりの理解を話す。教員になったのは34歳のとき。教員免許は26歳。採用試験を神奈川で受け続けて東京都も受からず2009年合格。このとき神奈川県独自の障害者枠で採用された何名かのひとり。高校福祉科の枠。もうひとりが中途失聴者で難聴の人。ふたり合格した。やはり福祉を教えている。なかなか大変な職場に行ってしまう。勤務は短かった。ほめられたことは、話せることは少ないが、授業は一年生の社会福祉基礎、三年の福祉演習。コーラス部の朝練指導など。文化祭で伴走したり図書委員。司書のかたとバザーをやったり古本の企画したり、進路指導の部署に所属。全校向けの講演会を企画したりした。往復4時間半かかり、乗り換え乗り換えで危険な遠距離通勤だった。残業、休日は研修三昧。どの先生も経験あると思うが。私の場合執拗なハラスメントがあった。校長・副校長プラス二名の直の上司。アシスタントがいたが、短時間勤務のために業務に負担が重くなるとやつあたりされる。もっと軽くしろと言われてたり、もっと仕事を回せと言われてたり、毎日言われた。7人目はいわゆる傍観者。新人のためにかまっていられないということだったと思う。教育委員会のサポートも得られなかった。音声読み上げや

点字ディスプレイが手配されることになっていたが、現場で調整してくれず助手を頼るしかない。一人一台パソコンなんかないとわれて、パソコンなしで仕事した。点字ブロックも要望した通りつけられず。ばらばらについてるねと生徒が指摘するほどだった。しかし給料をもらっているので何か残していかなければと思った。特に全盲当事者なので障害者福祉の単元は力が入った。社会モデルや共生を伝える工夫。

先輩の教員福祉科主任が共生より自立を強調しろと言われた。「障害者との共生は好きではないんです」と言われて、心の中で負けるものかと思いつつ何か共生のメッセージを生徒に伝えたいと思い、市民講師として社会モデルのところやWHOの障害の分類を教えなければならぬ。視覚障害と一緒にできるオセロを使って説明した。形は目が見えるようにオセロをおすところが凹凸になっていて触ってわかる。オセロの白と黒で置くと磁石になっていて落ちないようにしていた。つるつるが白、黒がざらざら。促進要因と、阻害要因について、白黒を触ってわかるでオセロに参加できるというふうにした。

職場を去ることになりその後も福祉教育の活動はつづけてきて、大学院は5年前に終了して、私以上に重度な障がいをも併せ持っている人で、21人にインタビューをした。刺激的だった。聴覚障害の方に刺激を受けた。それをもとに修士論文を100ページ書いた。社会教育のプロジェクト、全国の方々と様々な問題を議論し合っている。戸田先生がUDトークと言うのが出ているが社会教育の学校でも使っている。共有できる。

目の見える子どもに教育する意義。自分の両親も全盲で、母は生まれつき、父は20歳で中途失明、40歳で左麻痺。今は老険に入っていて、介護度が重く、コロナで会いにも行けず家族ばらばら。弟は健常者。視覚障害だけでも三人三様、それぞれが存在をかけた人生。学校や地域での姿を通して何かを感じてもらいたい、ただそれだけ。石川准さんのことによると存在証明。親も盲、ひとりで暮らしているけど同じ町にいるよ、という姿を通して、多様性を、存在をさりげなく伝えることが大事だと思う。

田村：厳しい中でのことを、冷静に話して下さった。神奈川の採用枠の2010年度、もうひとり中途失聴のかたが合格された、その方はどうなった？

渡邊：別の福祉科高校に配属になって、一年目は研修でいっしょになったが相模原市内で長く勤めている。聴覚障害の経験だけでなく福祉全般の指導をしている。

田村：福島さんからコメントを。

福島：自分は目と耳と両方の障害があり、お話しいただいた方は視覚障害二名、聴覚が一名だが、自分は18歳まで見えて聞こえる子どもに近かった。9歳から18歳盲学校。全盲として過ごし、18歳で全ろうになった。本日のシンポジウムのテーマであるクロスアドボカシーは耳慣れないが、私にとっては興味深い。話がとぶが30代のころから国の審議会に内閣府や厚労省とか、障害者に関する審議会。どういう人がいるかという、全国団体の代表者さんとか出てくる。自分の障害についての大変さをアピールして、なんとかしてくれと要求。私の印象としては、自分たちの業界の利益を主張する事業者団体みたいな。自分が差別され

ている困っていることを改善することを要求することは自然ではあるが、互いの共感を感じられない。学識者という立場なので盲ろう者の利益を発言する立場ではなく、共通のテーマを提起している。なぜそうするかというと、生い立ち。9歳以前18歳まで全盲、耳が聞こえなくて盲ろう者になったとき全然違う困難があることに直面して、全盲だったとき聴覚障害のことを想像もしなかったことに気づいた。盲ろう者になってみると単一の障害者から理解されなかったり、距離をとってくる。

さまざまなハンディ、障害だけでなく貧困、被差別、女性の権利とかつながついていかないと自分だけの狭いところでは社会の理解が得られないし、アドボカシーではないと思っていた。クロスアドボカシーというのはとても面白く思っている。

今日の三人は菊池先生の話をついて当事者性と教師の専門性のせめぎ合い、相克、どちらが重要かという問題ではなく、当事者性が強調され、教師としての部分がないのはいやだというのはよくわかる。一方で、当事者性というのは大事だと思っていて、デフフッドというのが大切だというのはその通り。渡邊先生については、胸の痛む酷い対応。障害があるなしに関わらず、起こり得るハラスメント、教育委員会も問題にされない黙殺してしまう。現在も見られる社会構図。皆責任を負いたくないから知らん顔をする。その上に障害が加わって二重、三重の大変さ。「共生は好きではない、自立を教えろ」というのも当事者か教員か、と同じように存在の相克にている。共生がなければ自立もない。社会が助け合うことは前提で、障害があってもなくても共に生きることがなければ生存できないし、自立もできない。それが管理職がわからないだけでも酷い職場環境だったんだと胸が痛む。戸田先生が一番安定した感じで語っておられた。ろう者として。

渡邊先生の存在証明。1992年1999年に石川先生が人はなぜ認められたいかという本を書いていて社会が存在証明を求める。渡邊先生の報告を聞いて大変だなあと思った。息切れしんどい。存在証明をしなくても一緒に生きていく。相手にも存在証明を求めてしまうので、まずは生きること。障害があつたりなかったりしながら、生きていくこと、人と人とが関わることを大切にすることが必要なのだろう。戸田先生はろう文化というのが、盲人には文化があるのかと考えるとあまりはっきりしたものはない。どうしてもできないところを補って、見えてる人に近いところでごんばろうという暗黙の共通認識がある感じがするが、それはおかしいなと子どものころから思っていた。いくら頑張っても見えるようにならないので、ゴールは見える人のスタート。そんなレースをしても意味ないと思った。中学ぐらいのとき全盲の先生が軽音楽の顧問で担任ではないが、「福島、目が見えないとはどういうことや」と聞かれた。どっちも全盲。あえてどういうことかと聞かれてぐさっときて、その当時考えた。高校生の先輩、盲学校の先輩から衝撃的な話を聞いた。自分の本質を知った体験があった。お兄さんがガソリン被って死んだ。焼身自殺。ご両親とその人で死体の検分。服が焼け残っていた。両親が「息子のものです」と。彼女には見えない、わからない、これが見えないということだと思った。スクリーンリーダーを使えばいいとか誰かに手伝ってもらえばいいということではなく、どうにもならないこと。障害者に限らず、だれにもどう

ている困っていることを改善することを要求することは自然ではあるが、互いの共感を感じられない。学識者という立場なので盲ろう者の利益を発言する立場ではなく、共通のテーマを提起している。なぜそうするかというと、生い立ち。9歳以前18歳まで全盲、耳が聞こえなくて盲ろう者になったとき全然違う困難があることに直面して、全盲だったとき聴覚障害のことを想像もしなかったことに気づいた。盲ろう者になってみると単一の障害者から理解されなかったり、距離をとってくる。

さまざまなハンディ、障害だけでなく貧困、被差別、女性の権利とかつながつていかないと自分だけの狭いところでは社会の理解が得られないし、アドボカシーではないと思っていた。クロスアドボカシーというのはとても面白く思っている。

今日の三人は菊池先生の話をもつて当事者性と教師の専門性のせめぎ合い、相克、どちらが重要かという問題ではなく、当事者性が強調され、教師としての部分がないのはいやだというのはよくわかる。一方で、当事者性というのは大事だと思っていて、デフフッドというのが大切だというのはその通り。渡邊先生については、胸の痛む酷い対応。障害があるなしに関わらず、起こり得るハラスメント、教育委員会も問題にされない黙殺してしまう。現在も見られる社会構図。皆責任を負いたくないから知らん顔をする。その上に障害が加わって二重、三重大変さ。「共生は好きではない、自立を教えろ」というのも当事者か教員か、と同じように存在の相克にている。共生がなければ自立もない。社会が助け合うことは前提で、障害があってもなくても共に生きることがなければ生存できないし、自立もできない。それが管理職がわからないだけでも酷い職場環境だったんだと胸が痛む。戸田先生が一番安定した感じで語っておられた。ろう者として。

渡邊先生の存在証明。1992年1999年に石川先生が人はなぜ認められたいかという本を書いていて社会が存在証明を求める。渡邊先生の報告を聞いて大変だなあと考えた。息切れしんどい。存在証明をしなくても一緒に生きていく。相手にも存在証明を求めてしまうので、まずは生きていること。障害があつたりなかったりしながら、生きていくこと、人と人とが関わることを大切にすることが必要なのだろう。戸田先生はろう文化というのが、盲人には文化があるのかと考えるとあまりはっきりしたものはない。どうしてもできないところを補って、見えてる人に近いところでごんばろうという暗黙の共通認識がある感じがするが、それはおかしいなと子どものころから思っていた。いくら頑張っても見えるようにならないので、ゴールは見える人のスタート。そんなレースをしても意味ないと思った。中学ぐらいのとき全盲の先生が軽音楽の顧問で担任ではないが、「福島、目が見えないとはどういうことや」と聞かれた。どっちも全盲。あえてどういうことかと聞かれてぐさってきて、その当時考えた。高校生の先輩から、盲学校の先輩から衝撃的な話を聞いた。自分の本質を知った体験があった。お兄さんがガソリン被って死んだ。焼身自殺。ご両親とそんで肢体の見分。服が焼け残っていた。両親が「息子のものです」と。彼女には見えない、わからない、これが見えないということだと思った。スクリーンリーダーを使えばいいとか誰かに手伝ってもらえばいいということではなく、どうにもならないこと。障害者に限らず、だれにもどう

素もあるかもしれない。小学生には小学生に分かり易いことばで、高校生になったら大人の扱いをしてほしいと言う生徒も多いので言葉を選びながら。福島先生のもっともっと掘り下げると言うことが大事だなと思った。石川先生の文献を勉強しなさいといわれたのかなと思う。聴覚障害については不勉強だが、ガイドヘルパーに難聴の人がいて、歩くとき、「後ろから自転車が来ます」と教えたりします。ヘルパーさんは目の前を教える。自分は後ろを教える。全身を使って、五感を使って。結構楽しい。これからも楽しみながら掘り下げて生きていきたい。

田村：当事者の方々が20年以上のキャリアを紡いでいるという形で話を聞いたのは貴重な機械だった。ここにクロスアドボカシーという考えを入れられたのはあたらしい試みだったかなと思う。パネリストの皆さんに拍手を。

10分間休憩をとり、53分開始にします。

第二部

星野：社会福祉協議会という団体は制度に基づく福祉と、制度に基づかない福祉。

ボランティア市民活動センターでは二点の目標。一つは障害をもつ人をサポートできる人を増やす、二つ目は障害のある人の参加できる場を増やすこと。

手話講座、点訳講座とスキルのある人を増やす。福祉教育は当事者性。当事者の方も勉強したり、大きな力を引き出していく。福祉教育に触れる人が増えることで、理解が深まる。当事者に地域のいろいろなところに出向いてもらう。

二つ目の社会参加。地域のために役に立ちたいという方の中には、二割弱が障害があるか、障害の背景を抱えている方が登録されている。認知症、不登校、引きこもり、発達障害との関わりなど、できるだけ社会に参加できることを目指している。社会参加を増やしていくというのはサポートする人を増やしていくことと連動している。周囲の方の理解を深めながら、共に活動していただく。障害当事者も自信をもっていく、周囲の偏見をなくする。当事者も自信を高めて行って、広い社会参加を。シンポジストは、清瀬の中で活躍されている方ばかり。障害当事者の力を高めようという方。

これまでいろいろな場で自信を高めていたり、挫折を経験されたのではないかと思う。お三方の話を楽しみにしている。

田村：早速最初に萩原朋美さんより。

萩原：埼玉県新座市の認知症高齢者のグループホームで調理をしている、メニューは決まっていますいろいろなものを作る。利用者の状況に合わせて刻んだり液体にしたり。体調が悪い方からおかゆにしてほしいなどのニーズがある。トイレ誘導なども。時間があまったら折り紙やぬりえ。利用者はろう者と認識してくれて、身振りや指差しで、UDトークなど使って理解している。が、認知症だと誤解も多く、想像して紙に書く。職員には少し手話を覚えて

もらっている。事故で片目見えなくなった人がいて、トイレに行くときは転ばないように誘導し、見える範囲に誘導する。ろう者だとわかっていて視線を合わせてくれる。

昔、駅の改札口がひとつしかなくて、踏切を渡るとき、視覚障害の方と会って毎朝、われさきに駆けていく人がたくさんいて、視覚障害者がいるので、気を付ければいいのにと思った。落ちそうになったとき引っ張って助けた。ありがとうと言っているようなのだけれども聞こえない。補聴器をさわってもらって、伝えようとしたが伝えられず、走っていった。次の日、私の歩く音を覚えていたようで、何か言っているけど、またわからず逃げた。母に家に帰って、一緒に行ってもらった。その方が「転びそうになったのを助けてもらった。反応がないのでおかしいなと思った。お礼を言いたかった。」とのことで、毎朝一緒に通うようになった。その方と会うこともなくなったがよい思い出だ。

セゾンに努めていた時「飲み会に行かない」と言ったら、部長が、「どうしてこないの」というので。「20人あるいは40人になるし、退屈だし、、、」と言ったら部長が、「皆で筆談にしよう、そしたら来てくれる？」と言われて、行った。店員にまで紙を渡して筆談させた。

筆談のメモを忘れたら欠席、などというルールを作った。全国に支社があり、全国のパーティーも、社長が「なぜ来ないのか」というので、「筆談だけで3~4時間は無理。手話通訳がいれば。」と言ったら手話通訳を入れてくれた。支社の方とはメールだけで、会ったことがなかったので、よかったなと思った。理解のある人たちだったが妊娠をきっかけに辞めた。電話ができないとか、理解をしてくれる人がいると仕事は続く。ひとりか二人でも理解してくれれば。

星加恒夫：全盲。タニタの体組成系、体内年齢47歳、実年齢62歳、愛媛出身。小さいときは少し見えて、小一だけ普通学校。少し見えたからではなく、両親が盲学校があるのを知らなかった。一年生の大きな文字で目に近づけてみて見える程度。小学校二年で松山の盲学校。高校から東京の教育大付属盲学校へ。ギターの勉強と、録音タイピスト、今でいうテープ起こしの訓練を受け、福祉作業所に就職。ギターの勉強をしながら、25歳26歳ごろまで。その後小さな会社に一年席を置いたが、自分で独学でプログラムの勉強をして、ソフトを組んで販売する事業を立ち上げる。昭和63年に会社を立ち上げた、平成3年に株式会社にして、自宅マンションにて一人暮らし。私生活も仕事もひとりで。開発しているソフトは点字の処理のソフト、視覚障害者やボランティアが使えるソフト。ワープロソフト、一定のキーだけを使って文字を入力する点字入力システム。

31期目の決算を迎える。地域との関わりとしては、清瀬市ですと10年前までは従業員も雇っていたが、仕事の面で地域との関わりはあまりなく、仕事以外の面で清瀬に引っ越してきたとき点訳の講習会を開いてくださいと言われて講師役をした。地域の視覚障害者団体に所属して親睦を深めたり自治体に要求したり、あかりの 아이폰 の講習会、点字のソフトの講習会をやらせてもらったり。点図のプリンターの講習会の講師をやったり。

高校生のとき45年前、パラリンピックの国内版、身障国体に佐賀に行った。ろう学校の女子生徒と仲良くなりひとりと文通した。大会後、点字の手紙が届きびっくりした。カナタ

イブを持っていたので、自分も返事を書いた。一度だけ盲学校の寮に会いに来てくれた。

安田：現在清瀬市介護付き有料老人ホームでケアマネをしている。先天性脊髄の疾患、四肢体感障害。1級で、立ったり、歩いたりできない、手も力が弱い。ペットボトルが持ちにくい。簡易型電動車いす。

小さい頃から誰かの役に立ちたいと思っていた。一般学校から薬学部、薬剤師として薬局に勤務。調剤、市販薬、処方箋を扱う。調剤業務とは薬を棚から取ってきて、あつてるかどうか監査する監査業務。実際患者さんに渡すときの投薬業務。ピックアップができないので監査と説明をやった。市販薬のついては相談に乗ったりしていた、薬のたながとどかないとお客様にとってもらっていた。相談しながら。車いすと言うことで患者さんに覚えてもらいやすかった。介護の方もやってみない？と言われて、ケアマネージャーの資格をとった。老人ホームはバリアフリーなので異動に苦労はないが電話に手が届かないので動かしてもらったり、パソコンも使いやすいうように整えてもらっている。困っていることをうまく言語化することが大事だがなかなか難しい。頼るときは頼る、そしてありがとうという、ということには気にかけている。老人ホームに勤めているが、利用者さんは同じ車いすの人もいたので「あなたの部屋はどこ？若いのに大変ね。」と言われてたりする。サポートする人と言うのはこの人に頼んだらよさそう、とか、感じる。利用者にとって自分もそういう存在になりたい。そういう雰囲気を出せるように。

高齢で有料に入る人は急に車いすになったりすると、車いすに対する思い込みがあり、家族も、どこにも行けない、と思う。お芝居やコンサートに行くのが好きで、どこでもいくよ、車いすの席があるよ、というと驚かれる。駅員が手伝ってくれるとか、駅にエレベーターがありますよ、というと驚かれる。実際電車で車いすの人を連れていくこともあった。西武球場。車いす席を手配する。介護職員、安田さんそんなところ行くの？と言われる。歌舞伎の好きな利用者さんを歌舞伎座に連れて行ったりする。

ケアマネージャーの仕事も多岐にわたり、いろいろな意見が違ったりする。職員の中でもちがったりするのでまとめるのはなかなか大変。車いすユーザーの経験とか薬剤師として医療の知識を使ったりしていることは利用している。利用者さんが笑顔になることが目標。

田村：三者三様の人生を歩まれてきた。視覚障害、とか枠にはめられて困ることは何か。他の障害の方とコミュニケーションをとることのエピソード。

萩原：ろうは見た目は同じなので、自分から言わないとわからない。無視したと思われてしまう。ろう者であることは恥ずかしいことと思っていないので周りに伝える。視覚障害者と踏切で助けた経験。片目の見えない人に、筆談や身振りとか、指差しなどを。相手もそういう風にコミュニケーションをとってくれる。清瀬市の聴覚障害と足の不自由なお母さんがいるが、手話で話すのが無理な時に、「送り迎えをやらしてもらえない？」と言われてたりする。

車で送る。買い物に行きたいというときにはつれていってあげる。私の周りにはいろんな障害を持った人が多い。

星加：先ほどの話、身障国体のときの話。大会二日目に水泳に参加するのに盲学校から3人、後の二人陸上。引率の先生は陸上に行ってしまうと、陸上競技場だと交流もなかったと思う。水泳はプールの周りに観客席があるわけではないので、ブロックに座って待機したり、で、面倒見てた都の職員もどこかに行ってしまう、ろう学校の先生が世話することになり、ろう学校の女子がガイドをやってくれたり、自然な形になった。ろう学校の引率の先生が指文字を教えてくれた。50音を覚えた。一日女子生徒さんと過ごした。不思議な体験。まさか点字の手紙がくるとは思わなかったのでびっくりした。高校卒業して社会に出て手紙を書くのを忘れ、自責の念にとらわれている。

安田：他の障害の方と、今まで触れ合うことがなかった。老人ホームにいたので、認知症、緑内障が進行した人、高齢のための難聴、いろいろいらして、ひとりひとりコミュニケーションが取りやすい方法を考える。聞こえづらい人にはホワイトボードを使ったり、右耳、左耳どちらが聞こえやすいのかというようなこと、低い声が聞き取りやすいのか聞き取りにくいのかとか。目の見えない方はお皿を探していたりすると、位置を変えたり。気づいたら他の職員にも伝えるようにしている。一人一人違うので手探り。

車いすに乗っていると、車いすの方はさまざま、パラリンピックに出るような人のような、上半身で何でもできる人、立ったり動いたりできないので、日常に介助が必要な人もいる。障害って、車いすでもいろいろなのに、ひとくくりにされると。自分は立つこともからだを動かすこともできない。介助が多くなる。

斉藤：当事者活動をおはなししてほしい。

安田：デイログというスマホアプリを開発している団体の手伝いをしている。スマホでバリアフリー情報を投稿してもらって、google マップに紐づけて、当事者も健常者も投稿してくれて、スマホの情報で、当事者目線で多目的トイレの情報とか、こののレストランは大丈夫だよとか、当事者でないとうからないこともあるので、安心して出かけられるアプリを開発している。是非ダウンロードしてもらいたい。

田門：聴覚障害の弁護士。一番大切なことはインクルーシブだと思った。星加さんのお話にもあったように社会参加というのが増えてくる。その中にインクルーシブが含まれる。障害者がいて当たり前のコミュニティー。萩原さんのセゾンでの経験、安田さんの経験、様々な努力があったと思う。弁護士をしているがろうの弁護士は少ない。他にもろうの弁護士がいることも大事だし、他の障害をもつ弁護士も必要。わかい弁護士の力になれたらなと思う。ある組織にさまざまな障害者がいることがよい。どう動いていいのか気づきにくい。コミュニティーが強くなることだ。踏切で、会った話、UDトークを使ったりした経験もある。障害がある方、様々な人がいることがインクルーシブの意義だと思う。自分が自分の障害の特

性を理解するためにも様々な障がいを知ること。ろう者のコミュニティー、ろう教育でも支援の大事さを学ぶ。コミュニティーの中で生きていくことを学んでいると障害のない人にも心のバリアのない状態。

田村：インクルーシブな社会というのが人により違う。意味を考えることは滅多にない機会だと思う。あかりの方は。

村野：あかりというグループで茶話会を活動の柱としている。視覚障害については多少理解は持っているが、障害を乗り越えてのお話を聞いたことがなくて、車いすの方がどこまでできるのか、いきなりうかがうことができないし、聴覚障害は見ただけでわからない。白杖みたいなものがない。自分の障害の困っていることも明確にする必要性がよくわかった。今考えているのは障害の壁を越えた機会があったらいいなと思った。

山田：清瀬でボランティアをしている。星加さんのソフトで9年間なんとかやってきた。どんな点訳をしたら利用者さんに読み易いのかなと思うのでアドバイスをください。

星加：ひとことでは、、、。

渡邊：地域のネットワークと言うか、お一人お一人前向きに活動しているのが共感を感じた。職場の関係性をつくるのは難しい。皆前向きでよいと思った。かつて点訳をお願いしていた。点訳の資料、紙ベースで必要な時、印刷をお願いしたりしている。パソコン点訳のできる方々が利用する。地域によってはパソコン点訳ではないPCで、古いんですけどどうしたらいいですか、というようなことを聞かれる。ディスプレイをよみながら聴いていて、デジタル化というのもすすんでいて、点訳の方のご苦労も減っていくかなと思っている。校正は完璧ではない。紙ベースのもので、点訳者の方の目をお借りしたい。

有上：萩原さん、セゾンに入社したのは？

萩原：ハローワークで。いい会社だからと勧められた。池袋のサンシャイン26階で働いていた。上の階に20人聞こえない人がいたが、自分のフロアは一人だけだった。いつも手助けをしてくれる年の近い同期の人と筆談しているのを見て、気づいてくれていい上司だったなと思った。辞めてもったいなかったなと思う。

田村：一部の方で、どうでしょうか。福島さん話したりないことはありませんか。

福島：短い時間で具体的なことと抽象的なことを言ってしまった。ひとつだけ捕捉すると菊池さんが私のコメントに対して、障害者にできないことはあるけれども、なくすという、できるだけ頑張る、取り組みについて悪いと言っているわけではなく、様々な問題やハンディを抱えている人の辛さとか苦悩というものを抱えながら生きていくことは否定することではなく、なくそうとするのではなく、最近思うのは目が見えないと言うこととか何かができないことが内部での喪失だとすれば、十年前の東日本大震災で津波でいきなり家族を失っ

た人に、何か社会はできるのか。社会モデルなら何か困ったことがあれば社会が率先してサポートすればいいのだ。それが障害というものだ、というが、それだけではカバーできないものがある。つなみで家族を失った人に、家を失ったから住居を提供はできるが家族を失ったらどうにもならない。辛さや苦悩は必然的につきまとうこと。苦しさを否定するのではなく、失くそうとするのではなく、苦悩とともに生きている人、人間全員なのだが、自分たちの苦悩とつないで連帯していく。それが本来の在り方。もっているネガティブなもの、制約をなるべくなくそう、なくさない人は連帯できないというのはきわめて危険な側面がある。医学モデル社会モデルではなく、第三のモデルとして、実存、実際に現実に生きて存在するというはお互いに支え合うような共生のモデルがないとだめ。、具体的にはどうするのか、それぞれの取り組みが意義がある。それぞれの取り組みが意味のあることだと思う。障害が違って、私にもあるよね、あなたにもあるよね、多文化共生的な発想だけでは浅い。それでは行き詰まる。私の個人的な感想。

具体的なことでもうろう者の関係で、盲とろうを取り巻く問題があればお答えするが、私から具体的な問題を出したいということではない。

田村：安易に横につなぐだけではだめだということは印象に残った。

谷本：毎日新聞の谷本です。渡邊さんに回答のお礼を申し上げたい。以前障害を持つ学生の教育実習について、障害をもつ方が教員になるということについて記事を書いた。こういう場を設けて下さって感謝する。第二部の話も興味深く、クロスアドボカシーという言葉も齊藤先生に聞いて勉強している。身近にクロスするところはたくさんあると思うのだが、福祉というのは別の世界にあるような意識がある。

田村：半田こずえさんいかがですか。

半田：視覚障害と聴覚障害の当事者の友人ともお付き合いさせていただいている。福島さんがおっしゃったように、共通点と相違点をただ横に並べるのは解決に至らないなと感じている。もうちょっと深めて発言したい。

佐々木：先ほど清瀬の点訳のボランティアから質問を受けた。一つは点訳の原本の種類による。一般的なものか、専門性が高いか。注をどうするのか、など変わる。もうひとつは、ユーザーがどこまで内容を必要としているのか。写真や図形をどこまで注をつけるのか、必要とするのか。点字図書館ではやらないが、ユーザーとやりとり。作って一方的に出すのではなく点訳者とユーザーがやりとりして、本当に満たされたものができる。私は全盲で、聴覚障がいとも関わってきたが、あまりに知らないことが多すぎる。色々な意味で深めていきたい。こういう場がもっと多くなってほしい。

福島：具体的な話、点訳に関して。当事者のニーズに基づいて点訳するというのはあるけれど、そもそもニーズというのとは何か。現実には推理小説の点訳が多い。視覚障害者が本当に任期があるのか。情報がないと本当のニーズは生まれない。本屋に行って並んでいるものを見ることもできない。皆が何を読んでいるのか、わかっているようでわかってない。日本人が何を読んでいるかという、圧倒的にコミック。ゴルゴ30が200巻まで行ったとか、かめありが200巻いったとかいっても視覚障害者はちっとも読めてない。そのことについて誰もタッチしない。漫画をやってくれと言ってもどうやって説明したらいいかわからない。点訳者の判断でやっていると言えばいいだけで、正しいも間違いもない。かめあり200巻170巻以降しか点訳がない。ギャップがある。見えない人にはそのギャップがわからない。東大の学生が読んでるのはコミック。?????実際の見えている人の読んでいる者とのギャップを考えていただきたい。正しい点訳を目指すのではなく、自分が適切だとおもうことをやってくださって、少々ずれてたって全然伝わらないよりいい。本音の部分のずれが出てくる。コミックの点訳をよろしく。

田村：そろそろ時間になりました。最後に第二部でお話くださった方に一言ずつ。田門さんにも一言。星野さんから。

星野：貴重なお話をいただきましてありがとうございます。多面的なお話をいただいたので、どこをどうというわけではないかなと思う。それぞれの皆さんが経験されてきたことを、こういった場が増えていくことによってクロスアドボカシーも進んでいくのではないかな。

萩原：楽しい話、つらい話、色々聞けた。勉強になった。ろうの立場ですが車いすの人がどういうふうにみているかを理解することができた。こういう場を作っていただき、斉藤先生お誘いいただきありがとうございます。手話講師として、夏休みにボランティアがある。子どもたちがろう者はどういうこと？と作文を書いてくださった。手話はことばという清瀬市教育委員会で賞をとることができた。とても嬉しかった。是非お伝えしたかった。

星加：福島先生、我が意を得たり。二つグループを立ち上げている。楽譜を専門に点訳する会。個人のリクエストに応じて点訳しましょう。点訳したものは皆で共有しましょうというコンセプト。40周年を迎えた。会員数も50~60人。アジア各国からも依頼が来ている会に成長した。私は技術者なので、科学技術の発展がパソコンを生み、こんなソフトを作れば便利になるよと。パソコンからインターネット、メタバースということばを盛んに聴く。とりあえずは視覚のバーチャル、音のバーチャル、触覚のバーチャルまで発展すると楽しみ。自動運転なども楽しみ。自分でも勉強したり、知識を増やしている。ブロックチェア、ブロックチェーン？次のネット革命に匹敵する技術。まだまだ立ち上がったばかりだが。障害者にどんな恩恵を届けてくれるのか。

安田：貴重な経験だった。斉藤先生お誘いありがとうございます。他の障害を持つ方との

交流がない。視覚障害・聴覚障害の文化もさらっとしか理解できていないかもしれない。とても良い機会だった。私の職場でも、介護に携わっている職員たくさんいるが、車いすの人の生活を知らなかったり、私が外出するというだけでびっくりされたり。近くにいても知らないことがたくさん。私の生活や困っていることを伝えていくことで支援する人の行動の変化につなげていけたらと思う。今日も職場の人が聞いてくれているので地域の方に聞いてもらうのはいいと思う。

田門：三人のお話を伺ってとてもいい企画だったなと思った。自分も当事者でいろいろ壁がある。皆さんがいろいろな活動をされていることが参考になった。

田村：最後に斉藤さんから

斉藤：印象に残ったこと、自分と違う人は話すたびに発見がありmこういう会ができると嬉しくて。安田さんが手伝ってもらいやすい人とそうでない人がいるというようなこと、なんとなく感じていた。あの人は支援ベタだよね、というようなこと。そういう感覚があることを障害のある方は感がいいんだろうと思う。私が誇りに思うことは、ろう学生が視覚障害者のテキストデータを本当によくやってくれるし視覚障害の学生がパソコンテイクをやってくれたり、聴覚障害の学生が車いすの学生の送り迎えをやってくれたり、支援上手なのである。そういう意味でも、障害を越えて交流することはいいことだと思うし、谷本さんと佐々木さんがおっしゃったこと。場がないので、ということ。谷本さんが別の世界にあるような、福祉というのは別の世界ち。本当に障害当事者とアライというか障害関係をやっている人間はそれに気づかなくなる。谷本さんのような方に言ってもらって、気づく。マジョリティが本音。知っているふりをするけど、あまり関心がなくて別世界。マジョリティが興味を持たないのは批判したいところではあるが当事者や関係者も違う障害にどのぐらい興味があるのか。悪気はないのだけれど、私も言語学だったので聴覚障害に興味をもち、視覚障害はあまりに正反対だと思っていたし、弁解するようだが健常者にはそれないの思いがあって、聴覚障害がわかっているからと言って他の障害まで知ったかぶりをしてはいけないとか、いろいろ気を遣ってします。この気を遣ってしまうというのの裏に、社会の差別構造もあるし、オープンじゃない、縦割り、というのが日本の社会なのかな、と思う。この5～6年視覚障害に足を踏み込むと、本当におもしろくて、最近視覚障害に夢中。触文化、触る文化とか、みんぱくに行こうとか、、、。要するににおもしろければいいと私は思う。でも、星野さんが二つの目的、とおっしゃったときに、ギクツとしてしまった。すごいなあ。ちゃんと目標を立てて、障害者のために貢献、地域のために貢献。面白いんだってば、というようなところが自分にはある。なんでも好奇心でやってしまう。リベラルアーツの大学だったので。とにかくこういう場をつくるのが大事で、支援する人、される人というのしか、今の日本の社会にはない。そうすると支援する人、アライが障害者の方にはいるだけで、やっぱり二つに分かれていることは変わらない。興味のない人をひっぱってこななければだめ。興味のなさ

そんな人にずけずけと入って行って、引っ張ってくると。それをやっていきたい。一番興味のなさそうな人に図々しくアプローチしていきたい。

感想

文化の違いを感じるころや、ほかの学生の体験談で改めて自分は福祉を学んできたということを感じた。

実際人と関わることに敏感になり、恥ずかしさや誰かがするだろうではなく、自主的に助けに行こうという気持ちにもなれた。山本さんが駅で助けに走ったという話があったが、私も迷わず声を掛けたり、行動ができるようになった。大学生で自分自身が一番成長した部分だと思う。

真のユニバーサルデザインはないというのは新しい考え方だった。視覚障害とひとくくりにしても全く違うために視覚障害の方全員に対応できるものは少ないのだろう。カラー分けなど行っても、人によってはそれが見えにくいというのは驚きだった。

学校の話を行う中で、自分の小学校のことを思い出した。私は4年生からその小学校に入ったのだが、車いすの生徒がいた。一年生の時からその小学校の生徒であった。学校は私が4年生の時に新校舎になった。しかし、新校舎にはエレベーターが設置されていなかった。その子が上の階に行くときは付き添いの先生がその子を抱えて階段を上がっていた。今振り返ってみると、なぜ改装を計画する際に、エレベーターの設置を考えなかったのだろうか。車いすの子がいるのはずっと前からであり、車いすの子も生活のしやすい設備を整えるべきだったのではないか。今考えるととても不思議な話だ。

私は、障害者が普通の学校で、先生になるためには、一般的な障害者に対する知識と理解の向上が必須だと思いました。資格を取得したとしても、他機関の協力がないと先生にはなりません。「障害者だから先生なんて出来ない」とやる前から否定していたり、自分にとって不都合だったり、面倒くさかったりといった感情で対応してしまったら、教育現場も社会も進歩しません。また、小学校の先生を視覚障害者の方が担当するとなった場合だと、生徒達とどのような関係性を築いていけるのか、視覚障害者の方が先生をする時にどの程度のサポートが必要なのかを検証する必要があると思います。障害者が普通の学校の先生になるように、障害者と健常者が共生することで、お互いに、自分に出来ることは何か考え、行動出来るように意識が変化していくと考えました。

オンラインや ZOOM を繋げば障害を持つ人も教員として働けるという意見も出たが、ただ授業をすればいいというのが教員の仕事ではない。授業をするだけ、障害について話すだ

けであればゲストスピーカー的になってしまう。それは障害を持ちながらも教員になりたいと思う人の本意には反するのではないかと感じた。生徒をよく見て、授業以外でも関わることのできる場面をしっかりと作ることが必要なのだと思った。そして事務作業的な仕事(校務分掌など)は他の教員の配慮や手助けができるようにする必要もあると感じた。本当の意味で障害がバリアにならない職場を民間企業も作るよう努力をしている時代だからこそ学校現場が遅れを取ってはいけない。

第三部

連携協議会

2021 年度

連携協議会議事録

第1回(6/7) メール 第二回(8/7) Zoom 第三回(10/29) Zoom

連携協議会委員

斉藤くるみ	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授
志村雅子	清瀬市健康福祉部障害福祉課
星野孝彦	社会福祉法人清瀬市社会福祉協議会きよせボランティア・市民活動センター
福島智	東京大学先端科学技術研究センター・教授
大胡田誠	弁護士
日比野清	社会福祉法人日本ライトハウス常務理事（元佐野短期大学教授）
菊地理一郎	東京都八王子盲学校教諭
田門浩	弁護士
末森明夫	産業技術総合研究所主任研究員・日本手話学会会長
戸田康之	大宮ろう学園教諭
田村真広	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授（社会教育・ボランティア論）
渡邊健一	相模原市経営評価委員会委員
日置淑美	日本社会事業大学視覚聴覚障害プロジェクト室コーディネーター、手話通訳士、盲ろう介助者

第一回 連携協議会

6月7日メーリス審議

3年間続いた「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害のセルフアドボカシー」が修了しまして、今年から「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学習を促進する地域連携プログラム～セルフアドボカシーからクロスアドボカシーへ」を実施。

30年前は視覚障害者と聴覚障害者は会話ができない、最も遠い存在だと言われていたが、今は ICT のおかげで結構一対一でも複数でも交流できている。大胡田先生（全盲弁護士）を紹介してくださったのは田門先生（ろう弁護士）。

視覚障害の先生の講義を深く理解するのは一般の学生より聴覚障害の学生であることにも気づいた。まずは清瀬市から視覚障害の方と聴覚障害の方にお互いの文化や事情に興味を持っていただきたい。清瀬の盲ろう（弱視難聴のような方も含めて）の方ともつながりたい。

最初は3年間の成果、先生方に講義をしていただいたり、先生方ご推薦の方々が作ってくださった教材などを清瀬の方々にも楽しんでいただきたい。その前提としてパソコンが使えないという方もいるかと思うので、学生に教えに行かせたい。しかし、またも緊急事態宣言、ワクチンも進まず、うちの学生が教えてに行くというのもご迷惑かもしれない。

前のプログラムの HP を新プロジェクトに改め、連携協議会貴の先生方のご著書の紹介や、作ったいただいた教材（講演の記録含む）をアップしたい。

昨年度やった福祉職等を目指したい視覚障害の方々のための講演会・シンポジウムを受講された方々のメーリスから Zoom 懇談会に発展して、先週金曜日盲導犬について Zoom 懇談会をやった。盲導犬の生き字引、日比野先生に口火を切っていただいた。そこで「聴導犬の話も聞いてみたらどうか」と言ったところ、「是非！」というお声をいただいた。清瀬市の方々との交流もできればよいが、Zoom が使えるようになっていただかないと全国の視覚障害者の方々と交流はできない。最終的には支援者も含めて皆で何か一緒にできたら、と思う。社大ではもう何年も前から視覚障害の学生のための教科書は聴覚障害の学生がデータ化している。

清瀬市健康福祉部障害福祉課の志村雅子様に入ってくださいことになりましたが、その他は今まで通り。こんなことをやったらどうだろうか等、ご意見をいただければと思う。

松田委員

コロナでも福祉の窓口は変わらず空き続けています。

この度は、「当事者に学ぶ視覚・聴覚障害者の生涯学習を促進する地域連携プログラム～セルフアドボカシーからクロスアドボカシーへ」の採択おめでとうございます。益々の広がり

が生まれることを期待し、祈念します。

私は辻浩さんからの推薦で、社会教育現場の職員の立場で参加させていただき、たくさん学ばせていただいたが、ろくな発言もできず、心苦しく思っていた。今後もあまりお役に立てないとおもいますので、お許しいただけましたら、そろそろおいとましたい。

もし、後任として推薦を求められるのであれば、相模原市在住の渡邊健一さん（45 歳）という方を推薦する。両親、ご本人とも全盲で、いまはアパートで独り暮らし。法政大学の大学院を卒業して一時は教職についていたが、職場でのいじめなどあったとも聞いているが、今は離れている。相模原市の図書館協議会の委員をしていた。

社会教育推進全国委員の会員でもあり、時々発信がある。私とは、「月刊社会教育」という雑誌の読書会のメールでつながっている。zoom の会議なら、彼も参加しやすいと思う。

もちろん、ガイドヘルパーさん付きの移動も可能。社会教育の全国集会にも何度も参加されている。<http://www.sagamiharashishakyo.or.jp/iihito/2010-0208-1114-1.html>

ご検討のほどよろしく願います。

星野委員

清瀬の当事者の方の ICT への認識は率直なところ疑問。具体的に動き出す段階では何らかの形でご協力できればと思う。

日比野委員

6月1日付で「社会福祉法人 日本ライトハウス」の常務理事を引き受けざるを得なくなってしまう。毎週週三日大阪でホテルに宿泊し、月に1回は伊豆に戻る。事業の新しいニーズに対応したリニューアル、今後の展望と具体策、来年度迎える操業70周年の記念イベント…など忙しくなる。

われ視覚障害者にとっては本当に厄介なコロナウイルスだ。なかなか周囲の人たちのご協力やお手伝いも直接受けられにくくなっている。1日も早い終息を祈るばかり。

星野委員

清瀬の視覚障害者グループの方とお話しする機会がありました。斉藤先生の事業のことも少しお伝えした。何かあれば協力なり、お話を聞くのは構わないと話されていた。その方たちはITサロンとかたちでiPadなども使った学習の場も継続されている。必要に応じ日程調整等を行う。

第二回連携協議会 (Zoom)

8月7日(土) 12:00-13:00 (その後合同研究会 13:00-17:00)

確認事項

- ・5月-6月 コロナ禍で、これまでメールで意見交換をした。
- ・クロスアドボカシーというアイデアを全国に発信したい。
30年前は視覚障害者と聴覚障害者は会話ができない、最も遠い存在だと言われていたが、今はICTのおかげで結構一対一でも複数でも交流できている。
- ・視覚障害の先生の講義を深く理解するのは一般の学生より聴覚障害の学生である。
- ・清瀬から視覚障害の方と聴覚障害の方にお互いの文化や事情に興味を持ってもらいたい。清瀬の盲ろう(弱視難聴のような方も含めて)の方ともつながりたい。
- ・最初は3年間の成果、連携協議会の委員および推薦してもらった方の講義、昨年までに作った教材などを清瀬の方々にも使っていただきたい。
- ・パソコンが使えないという方もいるかと思うので、学生に教えに行かせられればよい。
- ・緊急事態宣言、ワクチンも進まず、うちの学生が教えてに行くというのもご迷惑では？
- ・前のプログラムのHPを新プロジェクトに改め、連携協議会の委員等の著書の紹介や、教材(講演の記録含む)をアップ。
- ・パソコンは使えないけど集まるのはOKという清瀬の方には、集まっていたところ、ネットでつないで、そこで皆で聞いていただく・見ていただく、ということもよいが、緊急事態宣言下では難しい。
- ・昨年度の福祉職等を目指したい視覚障害の方々のための講演会・シンポジウムを受講された方々のメールからZoom懇談会に発展して、盲導犬についてZoom懇談会をやった。日比野先生に口火を切っていただきました。そこで「聴導犬の話も聞いてみたらどうか」ということになった。
- ・社大ではもう何年も前から視覚障害の学生のための教科書は聴覚障害の学生がデータ化している。
- ・前回の連携協議会委員の松田様より当事者で適任と思われる渡邊健一さんを推薦いただいた。
- ・相模原市の渡邊健一氏の自己紹介

相模原市の総合計画審議会委員を5月まで勤め、6月からは、同市の経営評価委員会委員に、就任。5年前、法政大学大学院の福祉社会専攻(修士)を修了した。

「身体障害当事者による福祉教育の意義 -教育方法上の工夫に焦点を当てた実証的研究」と題して、21名の当事者へのインタビューをして400ページの逐語記録を自

ら文字お越しし、論文にまとめた。

22年間、小中学校等での「福祉教育の講師」を続けております。

現在は、地域の市民活動をする傍ら、日本社会教育学会の「障害をめぐる」をテーマとするPJに、参画。16歳頃から全盲で、実家の両親とも全盲（父は脳卒中の麻痺による重複障害）のため、ある意味「クロス」した環境に育ちました。13年前から単身で暮らしている。仕事などの事情で、10年程前から、適応障害の患者ともなった。ファミサポ援助会員講習会を受講。松田さんには、社会教育の団体で全国集会の実行委員等をご一緒させていただくなど、大変にお世話になっている。

聴覚障害者との「クロスアドボカシー」という点について、「セルフアドボカシー」との違いなど、不勉強なところもあるが、一当事者として、「地域連携」という角度から、私の経験がお役に立てるのでしたら光栄である。

本活動について

1. 清瀬の「弱視の会」と「全盲の会」とが、別のコミュニティになっているとのこと、ハッとした。ろう者の場合、いわゆる中途失聴者・難聴者との組織やコミュニティがそれぞれ作られて、コミュニケーション方法が若干異なることからそれぞれで行動もされるというのはそれなりに頷ける。一方、視覚障害者同士ではコミュニケーション方法の違いというのはそれほどなく、暮らせるが、弱視者と全盲者などが一緒に…となると事情が変わる。障害の悩みや傷・苦悩は弱視と全盲とで微妙に異なり、双方との間で、組織づくりとなると路線の違いや、一人ひとり「情報障害と移動の障害」というダブルの難儀なバリアが絡んでくる故に、なかなか一緒になれないで来た歴史だ。（弱視者には目の負担がかかるため、事務的作業も組織運営も嫌う傾向がある。その分、点字や音声パソコンを使える知的な全盲の方が優位に立つということも現実。中途失明者であれば、社会経験の豊富な方々が多いので、盲のリーダー格になられるケースが散見される。ただその全盲者中心の場合、適切なサポートができる晴眼者（眼の見える健常者）の支援者が、なかなか育たずにすぐやめてしまうといった、「支援ノウハウの継承問題」もある。

2. 弱視は、視覚障害の中では多くの人数を占めている。が、組織ベースでは、弱視のリーダーは少なく、弱視の方から全盲の方への接触・アプローチをすることもそれほど多くはない。皆自分のことで精いっぱい。特に晴眼者（目の見える健常者）に近い位置にある弱視は、そもそも社会的な期待や評価で目のかけられ方が、全盲者よりも異なって高いハードルがかかっている。若い弱視者なら、その圧は相当である。これに高齢化・中途視覚障害化が加わる。こういった理由から、「弱視の会」のような同種の障害者同士の組織化というのは極めて困難なことではないか。

3. もうひとつ、考えられる要因が「人々の組織離れ」と、昨今の「自助努力による生活」を余儀なくされることを良しとする社会の風潮とが、年代を問わず、観念的に（良くも悪くも）根付いてしまっていることが、あるのではないか。組織離れ、これは行政への働きかけといった政治的運動を含め、闘争的で、中にはその運動活動家の経歴の有無による「組織内の階層化・上下関係」なるものが組織内にどうしてもできてしまう。そうした中でこじれる人間関係や、複雑な組織運営に関わるのはなかなかしんどいものがある。また、体力も知力もそれなりにいますし、啓発イベント・運動行動一つ行うだけでも、その企画・準備から片付け・その後の処理まで、生活時間のすべてをこの活動にさかれますので、本当に命がけの人生となる。こういう運動組織がベースの当事者団体には、よほど大切な何かのために犠牲にできるものがない限り、心身のエネルギーを奪われてしまう。関わりとすれば、人間関係つながりのある、必要最小限としたいのが実態。

4. 自助努力を余儀なくされるが故の聴覚・視覚障害者の“生きるハードルの高さ”。仮に〇〇の会といった当事者団体に入ったとしても、会を運営し継続的に活動していくハードルは相当しんどい。いわゆるピアカウンセリングやレクリエーション中心の会なら、多少は関係性も仲良く助け合い、そこそこに築けるかもしれない。しかし、組織運営が先に目的化してしまうと、会員も義務感が先に立ち、アイディア志向も官僚化してしまう。そこに「自助努力」。当事者団体が不要だというつもりは全くないが、類似・同種の障害種ごとの組織化を重視する、無理やり「団結せよ」というようなことの前には、同種でも「重複障害」とか「貧困」「海外にルーツのある方」とか、個々にいろいろな経緯がある。そうした人間一人ひとりの人生に、もっと学ぶというか、その障害性と人間性にスポットが充てられてほしい。福祉の領域でよく「セルフヘルプ」とそのグループ化が言われる。大切なコミュニティづくりだと思います。しかし、一人ひとりみんな違う。このセルフヘルプ化のみをすべての障害者、とくに聴覚・視覚障害にあてはめ推進しようというのには無理があり、障害の本質を見えていない議論のように見える。

5. そして、障害者同士だけの人間関係にとどめ、人生の大半を当事者運動などに費やさせることで、障害当事者の自明を縮め、多くの分野の人との矯正をしながら豊かな人生を送る権利と機会を奪ってしまうような行政や社会は、権利条約批准国としても、インクルーシブな社会をめざそうとしているはずの日本にとっては、健全とは言えないのではないか。（勿論、運動にその一生を捧げ、それを誇りにしてきた大先輩方、奉仕・支援者のご努力には感謝し、報いていかねばならないが。）

最近の活動

斉藤と「あかりの会」の会議

清瀬の弱視の会の方々は「仲間が増えない。お互いに弱視に便利なものの情報交換ができるとよい。」と言っていた。とにかくつながれない、これは行政が悪い、また医者も悪い、と

もおっしゃる方もいた。ゆるやかな連帯は必要なのだろうと思う。

「これ以上視力は上がらないとなると、もう来なくてよい、と医者と言う。放り出された気がした。生きて行かなければならないのに、だれも導く人がいなかった。」とおっしゃっていた。その方はたまたまその会のひとりと友だちだという方にひよんなことからめぐり逢い、その会とつながりアプリを教えてもらったりしたので、ラッキーだったと言っていた。連携ができたからと言って、それだけに縛られる必要はない。緩やかな連帯がなければ、社会の改善も難しくないだろうか。ろう者、特に日本手話者の連帯は強く、そのことの弊害もある。留年したろうの学生とその親に、「ろうの社会はせまいので、留年したことが日本中のろう社会に伝わってしまう。どうか勘弁してほしい。」と泣かれたことがある。市役所は手帳をもつ視覚障害者は把握していて、何か伝えるべきときは伝えていると思う。個人情報なのでその方々を私たちは知ることはできない。横のつながりがなくなると、行政からの上意下達で、民主的ではないのではないかと思うが、そのあたりは視覚障害の場合どうだろうか。ろう・難聴は大学に入ると、当事者の大学生の団体に入る学生が非常に多い。そして大学同士の状況の情報交換をしたり、大学に情報保障の申し入れをしたりしてきた。視覚障害者のほうはどうなのだろうか。学生の団体というのはどうだろうか。

・くるみ先生の熱意、障害研究への深い洞察による問いかけに、私もすっかり引き込まれている。緻密で丁寧な聞き取り調査をされておられるお姿に、感銘した。まず弱視の方々、なるほど、心当たりのあるお話でした。数はともかくも、皆さん仲良くコミュニティを築いておられる様子も伝わってきた。

・近年「ロービジョンケア」が言われるようになり、熱心に視覚リハビリとの連携や当事者への情報提供に取り組まれる眼科医さんもいらっしゃる聞いたことがある。逆に、「匙を投げる?」。治療で視力回復の見込みがない患者として“見放す”ような態度をしてしまう医師もいるようだ。

・私は、弱視学級が併設された横浜市立の小学校に通って、「校内通級型」というような形で、社会・理科と「自立活動（当時は養護・訓練＝ようくんと呼んでいた）を弱視級で教わり、それ以外は「親学級」（通常学級）で、学んだ。良い担任の恩師に巡り合い、今もこの先生とは、先生が校長をされている小学校で、3月に一日講師をさせていただくなどの、つながりがある。

・弱視の同級生が4人おり、それなりに仲良く、卒後も暫くは、励ましあう、遊び仲間として、ゆるやかにつながっていた。これらの経験は、今では財産。（白杖による歩行訓練も、点字学習も、この小学校高学年頃にさせていただいた。）

・中学まで弱視でしたが、全盲に限りなく近い重度の「見えにくい」見え方だった。そのせいからか、集団活動が苦手で、1対1で関わってくれる方との交流の方が多かったかなと。一所に遊ぶのも、嫌いではないが、眼の見え方の影響で、視力の良い子のサポートを受けることが多くなり、そこに負担感を感じるようになっていき、全盲になってからは、旧友の関係へと変わった。なかなか弱視のコミュニティは、心身の負担も出てくることもあろうかと。清瀬市の皆さんのように、つながりたい、団体を作りたい、といった思いがあることは素晴らしいし、ローカルの小さな地域ほど、大変なことではないか。

ロービジョンケアなどのリハビリを受けたい（支援のアプリなどを知りたいなども）、そういう本人が思いを持っているかどうかがまず最も肝心。それを応援いただける方が近くの地域にいらっしゃるかどうかが・・・。障害種を問わず、永遠のテーマだ。それらにどう関わるのかどうかは、本人が選べる環境が望ましい。そのための、行政も含めた「適切な情報提供」が、大切になる。

・狭い人間関係というのは、視覚障害者も似ている。一番象徴的なのは、大学進学か？専攻科で伝統的な「三療」のコースに進むか。この進路方針をめぐって、人の選別をされてしまう、という歴史。盲学校（の先生方）が、いかに全盲の生徒に大学進学への配慮・寛容さを持っているか？あるいは高等部専攻科という教育課程が、他の障害種に比して、訓育的というか、視覚障害者の生きる可能性を狭く見てしまう携行にあるというか、教育上の長年の問題を残したままで「特別支援教育」へと移行している現状があるように思う。

・大学生の件ですが、弱視の学生の会があるかどうか。20年ほど前に解散してしまったが、点字ユーザーの学生を中心にした民間の「ふみづき会」という名前だったか？盲学生の会があった。高橋実さんという全盲の、盲学生の先駆者の代表的な方が、50年もの長きにわたり、リーダーをされた。点字受験の可能な大学を調べて公表したり、盲学生が入学した大学の調査をし、盲学生への奨学金制度の普及など、大学の門戸開放運動をリードしてこられた。『月刊視覚障害』という雑誌の編集長で長年知られ、誌上で訴え続けておられた。そういった先人のおかげで、私たちの今がある。

・今では、筑波技術大学などを中心にした、大学間の障害学生支援ネットワークも進み、隔世の感がある。ろう者のように、フットワークが軽くはない（移動のバリアがある）のが大きな難点。特に全盲に近い方々の場合は、「一人ひとりが創立者の思い」で、独りになるのを恐れず、大学生活が楽しめるといいなあと考えてきた。

・6つの大学（うち4つが通信教育で学びました）にお世話になった私の長年の経験から

- ① 行きたい大学に目標を定めること、
- ②それがきっかけとなって、生きる可能性を広げ、モチベーションになり、自分を高め、

サポートしてくれる仲間や応援団もできるようになり、何らかの道が開けていくこと、
② そのためにも、あきらめないこと、
④同じ障害種（全盲・弱視など）の先輩がいない、受け入れ経験のない大学であったとしても、むしろよい。その大学で、自分が先駆者になっていくこと。

以上

第三回連携協議会準備メモ

以下1, 2, 3とありますが、主に3番のコンファレンスの企画についてご意見をいただきたく存じます。

1. 連携協議会委員の確認

清瀬市の健康福祉部障害福祉課係長志村雅子委員が異動（ボラセンの星野委員より情報）後任の力村さんと言う方にアプローチ中。

今回よりご出席、渡邊健一委員。

相模原市経営評価委員会委員、小中学校で福祉教育の講師等。

2. 近況報告

クロスアドボカシー

6月17日に、日比野委員の盲導犬のお話

7月30日に、袖山裕美先生の聴導犬の話、その後日比野先生も含め、自由ををさせていただき、視覚障害の方々から質問やご意見が続いた。

日比野先生は盲導犬イエラ、袖山先生は聴導犬サミーの著書。

日比野先生の本は視覚障害の皆さんデータで読んだことがあるとのことで、袖山先生の本をデータ化し、希望者に配布。

視覚障害の方々より、「あの時の会議は聞こえない方も入っていたようだけど、通訳さんの声は聞こえないだろうし、どうやって参加していたのですか。」という問い合わせ。

（ろう者はZoomで袖山先生ご自身が手話で話しているのがそのまま見えてた。）

戸田委員がオリンピックの閉会式と、パラリンピックの開会式で手話通訳。その他も社大非常勤講師および社大の学生が活躍。一方、清瀬市あかりの会の方々（星野様のおかげで幹部の方とLINEでつながっている）とオリパラの情報保障について、厳しい感想。

この点について田門委員が情報を流してくださった。

3. 文科省からコンファレンスをやるときは知らせてほしいとのこと。早急に企画をしたい。

「コロナ禍の問題とポストコロナにむけて」（オンラインコンファレンス）

対談あるいはシンポジウムを開催。例えば、(敬称略)

生活問題

日比野 vs 末森 vs 福島とゲストを探す？

権利擁護等

大胡田 vs 田門とゲストを探す？

教育（学校）の問題

菊地・戸田・渡邊とゲストを探す？

支援活動

星野・田村・渡邊

その他

10月29日に決めたいこと

日程・構成・テーマ・ゲストの人選

視聴者 の募集方法・募集期間

第三回連携協議会 (Zoom)

10月29日(土)

斉藤

まず委員の構成の話から。清瀬市の担当の方が替わって、新任にまだ連絡がついていない。松田前委員は自分より渡邊さんのほうが適任とご推薦された。渡邊先生一言ご挨拶を。

渡邊

相模原市在住13年。一人ぐらし。出身は横浜市。

水曜日夜10時に日テレのドラマで弱視を取り上げた「恋です！～ヤンキー君と白杖ガール～」をやっている。そのロケ地に母校の盲学校が使われている、どこが使われているのかわからないけれど、自分のまわりはそのことで賑やかになっている。

社会教育の実践研究で松田さんとご一緒していた縁で、このお話をいただいた。

9月始め長々とメールですみませんでした

斉藤

ホーム転落の問題を書いてくださった。日比野先生と立ち上げたメーリスでもちょうどそのことについての勉強会があるということが流れてきた。ドアには、お金がかかるから進まないのだと思うが、一般の人にもあったほうがいい。駆け込み乗車等。

戸田先生、オリ・パラの通訳ご苦労様でした。反響はいかがですか。

戸田

ろうの皆さんからわかりやすいろう通訳だったと言ってもらった。

社会事業大学の学生も一緒に担当して、本当によかった。

斉藤

他にも非常勤の先生とか、社会事業大学に関係のある人たちだったが、ぎりぎりまで発表がなかったので、驚いた。日本語対応手話で生活している人でも見るには日本手話がよかったということだった。通訳した学生はゼミの学生で、ゼミの中でもいろいろきいた。素敵なヘアスタイルにしていたけれど、NHKにやってもらったのかとか、、、。

実は後ろのスクリーンには映ってなくて、私たちに映っているスクリーンは合成だときいた。

戸田

そうなんです。

斉藤

日比野先生が、見えない人には、あまり良くなかったとのこと。まだまだだと？

日比野

まだまだというよりも、全部に解説がついていなかった。視覚障害の人の中にもいろんな競技に興味を持っている人がいる。それを聞いてわかりにくかったと言っている人も多い。

開会式とか閉会式では、十分な音声解説がついていたが、ラジオの方がよかった気がする。我が家ではラジオを聞きながらテレビを無音声で見る。

音声解説はついているけれど、全体的にわかりにくい部分もあった。もう一つは視覚障害者特有の競技もあり、解説をする人はよくご存じだが、実況中継する方はルールをよくご存じでない人もおられたようでわかりにくかった。

齊藤

日比野先生とその話をしたので、ゼミで画像をことばにすることはどういうことだろうと勉強している。副音声を探してきて、どんな問題があるのか、なんかひとつ探してくるよと言ったら、ドラえもんとかクレヨンしんちゃんに副音声ついているということがわかった。日比野先生がおっしゃったようにスポーツなどはルールがわからないと無理だなと言う話になった。福島先生はどのように情報を得られましたか

福島

ろう通訳が放映されたことはすごく意味があるが、そのことが話題になること自体が問題。ろう者通訳は一般化されていないということだ。日比野先生もおっしゃったように、視覚障害者への音声解説の問題も共通することはあると思う。当事者にとってどれだけ分かり易いのかというところが、付け焼刃と言うか、あとでひっつけたような感じ。

個人的にはオリンピックもパラリンピックも中止すべきと思っているのでメディアにはそう言っている。ともかくパラリンピックの在り方が問題だと思っている。デフリンピックと分離していたり、知的障害のかなりの部分はスペシャルオリンピック。それをどう考えるのか。

パラリンピックでかなりよい成績を上げた人はオリンピックを目指そうというように言われたり、メディアもそういうニュアンス。オリンピックに負けない、というような言い方をするので、要するに、日本語で言うと一軍に対する二軍、アメリカで言えば、大リーグに対するスリーエーのような感じで、パラリンピックがワンランク下に位置付けられているということではないか。そうじゃなくて質が違うんだと言うことを、質が違うけれど、そこには違う中で、感動があり努力があるんだという、そういうふうには受け止めないと、数字とか、タイムとか、距離だけで言えば、二軍だと思う。それを誰も言わないのが不思議だ。水をかけるようですみません。

齊藤

全く同感ですし、開催すべきではないと思っていたので、素晴らしい方が、通訳で出てしまったので、開催すべきでなかったと言いくくなってしまった。周りの人たちも開催すること自体が良くないと言う人が多かったのも、それとはまったく別の意義がある手話通訳にはあったんだということを説明しているところだ。こういう手話があるということ、小さいワイプではなく前に出て来てやってくれたということが影響が大きい。開催の是非も、どちらも大事な問題だと思っているけれど、と言っている。

星野

ボランティア市民活動センターでも、手話の入り口づくりということで、手話奉仕の養成講座を実施している。昨年の10月に始まり、コロナ禍で、三回ぐらい中断しながら、3~4か月カリキュラムが遅れながらも、継続している。定員を上回る申し込みがあったが、長期化すると落伍者というか学びの意欲のあった人が抜けていく。当初の参加者から半分ぐらいに減ってしまった。ボランティアをやろうとする人のモチベーションを維持するのが難しいと思う。社会福祉協議会全体では、子ども食堂をやっているが、参加した職員から聞いたところ、コロナ禍というところでは外国籍の方が大きく影響を受けており、貸付の相談が増えている。子ども食堂の方が集まる連絡会で聞いた事例では、子ども食堂に来たお子さんの親御さんが中国籍日常的に手話を使っており、言葉の問題プラス障害により支援が届きにくいという話もあった。

田村

この背景は見える方は見ていただきたいのですが、清瀬キャンパスのいちよの黄色。私も最初はオリンピック開催自体がけしからんと思っていたのだが、始まってみたら結構楽しんで見てしまった。特にパラリンピックにあって、オリンピックにない種目、ボッチャとか、非常にエキサイティングで奥深いと思った。やることはだれでもできる。勝つことはできないけど、やることはできそうだなと、ユニバーサルスポーツというものを考えるきっかけになったと思う。ちょうど学生が卒論でユニバーサルスポーツについて取り上げていたので、手話通訳も含めて関心が高まった。この研究会がクロスアドボカシーということで進められているが、私の役割は支援環境をつくる、そういう役割・立場も与えられているけれども、それについて、パラリンピックにまちがいなくそういうことを考えるきっかけを与えてもらったと思う。そういうクロスアドボカシーを目指したときに課題がたくさんあるなど思っているので言語化することも支援の一部だと思っている

田門

遅れてすみません。情報保障について、様々な課題がある。オリンピック等情報保障の問題は大切だと思う。森壮也さんが研究されていると思うが、オリンピックの場合、IOCと日本政府との契約の問題。初めからIOCはろう者のことを配慮せずにすすめていたのではないかと。というのは以前韓国で、ピョンチャンオリンピックが開かれたとき、開会式に手話通訳がついていなかった。IOCがテレビ局との契約上難しいと言っていたらしい。韓国の場合、閉会式も通訳がつかなくてびっくりした。韓国の例もあるので、世界ろう連盟とかそこからIOCに対してもっと強くはたらきかけるべきだったのではないかと思う。

日置

パラリンピックにろう通訳がついていたが、オリンピックにもついていたらよかったと思った。パラリンピックに社会事業大学の学生が入っていることは知らなくて、びっくりしたが、わかりやすい手話でやはりろう者のほうが通訳はいいなとあらためて思った。

斉藤

何かインパクトのあることをやりたいと思う。Zoomでやれるようになったのは便利。形に

はなると思うのだが、清瀬の方々とつながることが難しい。星野さんにいろんな方に合わせていただいているが、パソコンも持っていないし、電話だけという方が多くて、「学生をよこしてほしい、学生と一緒にサポートに入ってもらって自分たちの会で慰労の旅行をしたい」というようなニーズが多くて、クロスアドボカシーというところまでいかない。弱視の方たちは12月始めにゼミに来てもらって、途中で見えなくなることとか弱視の大変さを聞いてもらいたいと言ってくれている。うちのゼミはろう者が4人いて、ろうの方向に話が行って、弱視や全盲のことは知識が少ない。クロスアドボカシーは難しかったかなと思ったが、聴導犬と盲導犬の話をしたとき、聞こえない人と見えない人の話がはずんだ。視覚障害もなく、聴覚障害もない人よりは、ずっと話が進みやすい。連帯を強めていただけたら面白いこともできるかなと思う。福島先生もいらっしゃるし、私のゼミにも盲ろうがいる。前は院生に弱視難聴の学生もいて、その学生とも話している。

メモにあるように、テーマを定めて、面白く盛り上がりそうなテーマで。たとえばろう学校の先生である、戸田先生と、盲学校の先生の経験のある渡邊先生の対談とか、他にもシンポジストを呼んでくるとか。

コロナでの問題で、法的な問題があったのかな、ということなら、たとえば田門先生と大胡田先生と、興味のある方を混ぜてお話をしてもらうのも面白いのかなと思う。

文科省の方も入ってくれるので、文科省の方々に知ってもらえたらというようなことがあれば、話題に出てくるのもいいかなと。

福島

休んでいたので良く流れがわからないので、お伺いする。開催するのに、目指すものは、視覚障害と聴覚障害の人がもつ本質的な共通性、困難の共通性を浮き彫りにするのか、それとも視覚障害・聴覚障害を一緒に出して同じ障害者と言ってもいろんな立場がありますよね、というようなことを浮き彫りにするのか。

斉藤

どんなコンファランスができるか、で決まることと思っている。福島先生がおっしゃることも最初の企画書に入っていてどちらも重要だと思うのだが、コミュニケーションの点で、社会で不利益を受けている、非常に似ているのだ、と企画書に書いた。困難なありようは違うけれども。例えば聴導犬と盲導犬の話をしたときに、偶然にも着地したところは、どちらも一般の方に「ご迷惑」だと言われる、乗車拒否をされたり、レストランで断られたりすると言う話が出た。その時の口実が方便でしかない。LGBTの方もそういついて、差別は先に結論ありきで、差別したい、ということがある。マジョリティがこのままがいい、自分たちに合わせた社会がいいというのがあって、それでほかのお客様のご迷惑になりますとか、理屈をあとからつける。確かにあるなあとと思った。日比野先生の本にも出てくる。レストランで「他のお客様の迷惑」と言われて、「本当に迷惑な方いらっしゃいますか。」と言ったら、誰もいなかった。皆が「迷惑じゃない。入れてあげればいい。」と言ってくれた。レストラン側はどうぞと言いだしたけど日比野先生はその店を去ったという話。私はことあるごと

に、マジョリティに、本当に迷惑なのか、方便じゃないのか、と言ってみようと思っている。

渡邊

自分は盲学校の教員歴はなく県立高校の福祉科の教員。教育実習は盲学校でやった。2007年ぐらいに免許をとった。介護福祉士やヘルパーの資格をとらせる高校。田村先生が詳しい。福祉科の先生になってみたいなと思って、たまたま受かったが、なかなか厳しい日々を送った。教員を目指すきっかけは、中学から6年間横浜の盲学校に通った頃だった。

田村

高校福祉科というのができて20年になる。渡邊さんのことは別の会議で聞いていた。深刻なオチがあって、、、解雇？更新されなかった？

渡邊

本採用しない、という扱いだっただ。職場のICTの支援機器の整備の手続きをとって頂けなかったり、構内の点字ブロックが頼んだのと全然違った形のがばらばらにつけられていたり。往復4時間半かかるところに決まってしまう、こちらが悲鳴をあげてしまった。短時間勤務の助手がついたのだけれど、助手を含め7名ぐらいの方々から執拗なハラスメントを受け続けて、お前は教育には向かないというようなハラスメントが毎日あった。耐えに耐えて職場で倒れて、めまいが激しくなり、往復4時間半かかり、週10時間の授業をして、コーラス部の顧問、文化祭ではピアノの伴奏をしたり、図書委員会で子供たちとイベントをやったり。生徒との関係は良好で、最後の授業で先生辞めちゃうのとなつかれて非常に困った。職場からは視覚障害の教員は難しいとの喜悦論付けをされ、免職となった。短期間だったが、頂いた給料で、その後大学院の学費ができて、法政大学大学院で5年前修士を終えた。

斉藤

悲しくなってきた。

田村

10年ぐらい前のことか。

渡邊

そうだ。2010年ぐらい。障害者枠で採用された。

田村

置きながら働き続ける環境が作れなかったというのは、それ自体問題があると思う。採用はするけれど実態がともなっていないという、まさにコンファレンスで取り上げる課題かなと思う。

渡邊

元教員だと偉そうに言えるような経験がないので。大先生ばかりなので。

だからこそ、今小中学校を始め社会教育の舞台で、福祉教育という形で、22年活動を続けている。先日も20か月振りに対面式で相模原市の小学校で授業を2時間やった。昨日はオンラインで大学の授業をやった。教育には思うところがある。

斉藤

ひとつテーマにしてもいいかなと思った。視覚障害者、聴覚障害者、通訳をつけて、バリアフリー環境にして、子どもに福祉をどう教えるか、子どもに障害をどう教えるか、教える人の環境、というのも重い話だ。

田村

文科省も障害のある学生にどう実習をさせるかということに関心を持ち始めている。全国から見れば、数としては少ないけれど障害当事者の教職を採っている学生はいて、実習をどうやり遂げているかという調査を入れてきている。

斉藤

急に注目するようにはなっている。7月15日毎日新聞に出ていて、私のコメントも載っている。それを見て宮崎テレビが取材をしてきた。宮崎など自分は見られないテレビだけれど。宮崎は障害のある先生が多いと記者が自慢をしていた。特別支援学校にしか行かせないという問題をその記者から聞いた。全盲の英語の先生で、普通の学校の先生をやりたいと言っているのにずっと同じ盲学校に置かれているという話。

コンファレンスかシンポジウムをやるとするとどういうふうにしたらいいだろうか。

田村

平山さんがいる。ろう学校の教員になった当事者はいる。それを手がかりにする。渡邊さんにも覆面でも出てもらう。

斉藤

渡邊さんの体験だけでも詳しく聞く価値がある。いじめの構造。今の日本は一億総いじめっ子だ。

田村

障害者枠で採用しておいてその扱いはおかしい。

渡邊

2002年に初めて社会科で受験して、受けない年もあったが、8年越しで、やっと受かって採用された。私自身34歳でいっぱいいっぱい、微妙なとき。2003年に配属された高校にその7年前に非常勤の募集があって面接に行ったことがあった。そのとき落ちたので、リベンジで7年後、採用されたのだが、排除の論理というか、福祉高校と名乗っている高校だったので淡い期待を抱いてしまったが、なかなか適応しきれなかったという私の力不足でもある。福島先生が私の憧れのスーパースターなので、福島先生を思い出しながら、めまいが起きても頑張って、再スタートを切った。

田村

何回も言いますが、県教育委員会は渡邊さんの障害を知りながら採用した。赴任校まで決めている。県教育委員会は渡邊さんを教員にしたかったのだ。赴任した学校で、定着できなかったのだから行政の問題が大きい。今の学校現場、教職員の関係。障害当事者の教員をめぐって、どういう認識なのか、つぶさに検証したい。渡邊さんは複雑性PTSDだろう。

渡邊

たしかに検証できたらよい。

齊藤

教壇に立つ福島先生にあこがれてがんばってきたということで、福島先生と渡邊先生と、学校をテーマに戸田先生も。戸田先生は人気の先生で、戸田先生が行く学校の手話の地位が上がる。

テーマをいくつか挙げていただいて、あとはメーリスで話し合いをしてもいい。

日比野

当事者が一般学校の先生になる上でのさまざまな問題点は、視覚障害の場合はいつからかはよくわからないが、少なくとも自分の知っている人でも、相当の人数、いることはいる。一般学校にいる視覚障害教師の会を立ち上げたのも、ライトハウスの卒業生。現職復帰を目指してやっていった。多分戦後というと、大げさだけれど、公立中学高校で初めてだったのではないかと思う。そのあと関西を中心に大阪府でも教員採用試験、どこに行くかは勿論わからないけど、障害者もどうぞと言って受け入れられるようになった記憶がある。そういう方も参加させて、先ほどのような議論を展開するのは一つの方法。

当事者が教師になって、困りごと含めて、明らかにしていく。

齊藤

教育を柱にして、障害がある人が教える意義、ポジティブな面も話せるし、渡邊さんがおっしゃったような当事者が先生になるとき、どういう問題が日本にはあるのか、変えて行かなきゃいけないよねと言うのも。両方やってもいいと思う。自分は障害のある先生が教えるという意義が非常に大きいと思うので、非常勤の先生を連れてくる時も同じ実力なら障害のある先生を選ぶ。でも全盲の先生を国際福祉論に入れたら、晴眼者の常勤を採用されたりする。

故意ではないかもしれないけれど、歓迎されない雰囲気は感じる。

とても面白いのは、日本手話の先生が皆ろう者なのだが、学生の目つきが変わる。おどおどと先生に叱られる顔を見ると、こういう逆転が必要だなと思う。「ダメ、下手。」と怒られるのが大事だ。尊敬し始める。障害のある人に教わるのは、意識も変わるし、違う世界を見せてもらえる。国際福祉論の先生も全盲で元 JICA、国際協力をしてきた人で、晴眼者のダメなところがよくわかる。「何かできないとすぐパニックになる。自分たちはいつも壁がある。さあどうしようと。橋がなくなっていたらかければいい。ATM が使えなかったら晴眼者はパニック。自分たちはいつもタッチパネルで困っている。なぜそのぐらいでパニックになるのか。」というような話をしてくれる。いろんな世界がある。一科目に2科目分の効果がある。学校のほうで環境が整っていないのは残念である。こんなにバリアフリーと言っているのに学校がそんなことではだめ。

渡邊

上司の先生は共生社会とか、共生ということばを嫌う先生だった。共生を教えたいという指導案をつくと、共生より自立が大事だと盛んに強調していた。

田村

10年経って大分世のなかの雰囲気も変わったのではないかな。今なら違った展開をしたかも。検証する意義はある。特異な条件があったのかもしれない。渡邊さんを積極的に排除する人がいたとか、何か特別な条件があったのではないかな。

斉藤

偶然、そういう人が何人かいて、他の人たちが逆らえなくて、そっちについて行く。いじめの構造。

田村

教育委員会が解せない。採用しておいてその後、その扱いはないだろうと。

斉藤

採用するとバリアフリーが進むはず。うちの大学も車いすの教授が赴任して自動ドアができたりした。

福島

渡邊さんのご体験を聞いて胸が痛む。教師という立場の話だから、視覚障害も聴覚障害も、広く雇用、労働と考えれば、いろんな形のハラスメントがあったり、事実上の門前払いがあったりすると思う。末森さんは職場で情報保障がしんどかったと言っている。少しずつ改善されているがまだまだ足りない。森さんも言っている。田門先生は話ができるだろう。一つの案は雇用・労働、共生社会の裏側、光と影、もともと光はないかもしれないが、共生社会と言いながら何が共生なのか、まだ理解されていないし、障害者差別解消法があり、内閣府が改正するときパブリックコメントをやったが、「うまくいった例をお寄せください」と書いてある。悪い例こそ集めるべき。よいことを集めてお茶を濁そうという本根が見え見え。共生社会というのは実は健常者同士が共生できていない。健常者と障害者が共生できないのは、健常者同士が共生できないから。そのあたり雇用、労働というテーマにしたなら、組み合わせは斉藤先生、田村先生で原案を作ってもらおう。我々のほうで意見があれば出すしOKならそれでいいし。ゼロから議論をしても決まりません。

斉藤

今日出た意見を基に案を作ります。ここで言うっておきたいと言うことがあればどうぞ。

戸田

メールにもあったが当事者が教壇に立つ。視覚障害・ろうの当事者が教壇に立つ環境をつくるという共通点がある。もう一つは当事者として教える意義は何かというところ。ろう学校の場合、聞こえる先生ではなくてろうの立場で教える。手話のできる聴者の先生がいれば問題ないのか、ということ。どうしてろうの当事者が教えるのか、意義を踏み込んで議論しなければならない。それがろう学校で今必要だ。環境作りだけではない。ろう当事者が教える意義、狙い。ろう者は言語を使って教える。視覚障害の場合、見える人と言語は同じ。ろう者は言語が違う。それを基にした文化や、違う視点がある。ろう者の視点から教える。聞こえる人では見えないところがある。それが当事者が教える意味だ。宮城教育大の松崎先生が詳しく

語ってくれると思う。ろうの当事者が教科指導をする意義を案として入れてほしい。

斉藤

議事録を来週中に送る。また案も二案ぐらいできたら送るのでご意見をいただきたい。

うまく地域につながる話題にならないかもしれないが。

その他バリアフリー教材

<https://self-advocacy.themedia.jp/>

1. 高山亨太先生の

「多文化ソーシャルワークの理解」「ろう者を対象にしたアセスメント」「盲ろう者への支援」「ギャローデット大学の歴史」

2. 皆川愛先生の

「ろう者学—障害学との棲み分け」「真の多様性とは—ろう文化論を振り返る」

3. 郷戸夏子先生の

「日本ライトハウスの設立者岩橋武夫（1898-1954）について」

4. 阿曾あゆみ先生の

「聴覚障害視覚障害に関する参考文献リスト」

5. 大野ロベルト先生の

「日本の伝承・文学・芸能における視覚・聴覚障害の位相」

6. 村下佳秀先生の

「CODA について」

7. 齊藤くるみ先生の

「英語字幕・英語点字つき、手話による日本の童話」